

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第81号

平成12年度下植野南遺跡(上層)の発掘調査	石井 清司	1
弥生墳墓における <sup>やりがんな</sup> 鉢の副葬作法について(2)	福島 孝行	9
共同研究 古代の官衙と官道	伊野 近富・村田 和弘	17
平成13年度発掘調査略報		29
1. 常盤仲之町遺跡		
2. 長岡京跡右京第697次・東代遺跡		
3. 市田齊当坊遺跡		
長岡京跡調査だより・78		35
センターの動向		37
受贈図書一覧		39

2001年 9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

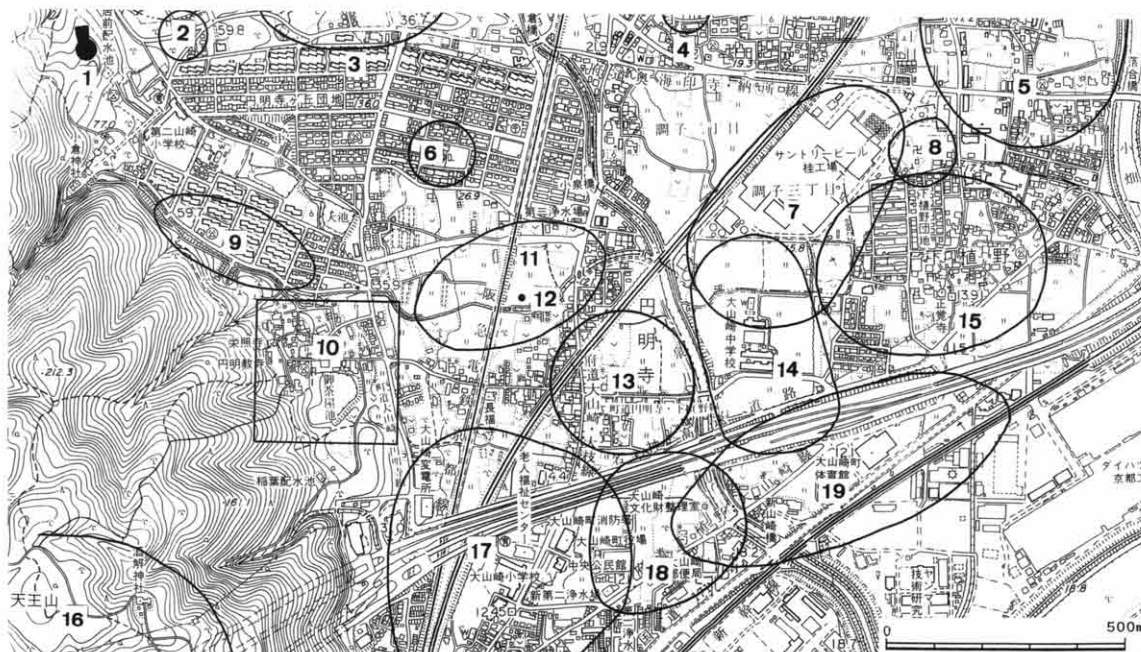
しもうえのみなみ  
平成12年度下植野南遺跡(上層)の発掘調査

石井 清司

1. はじめに

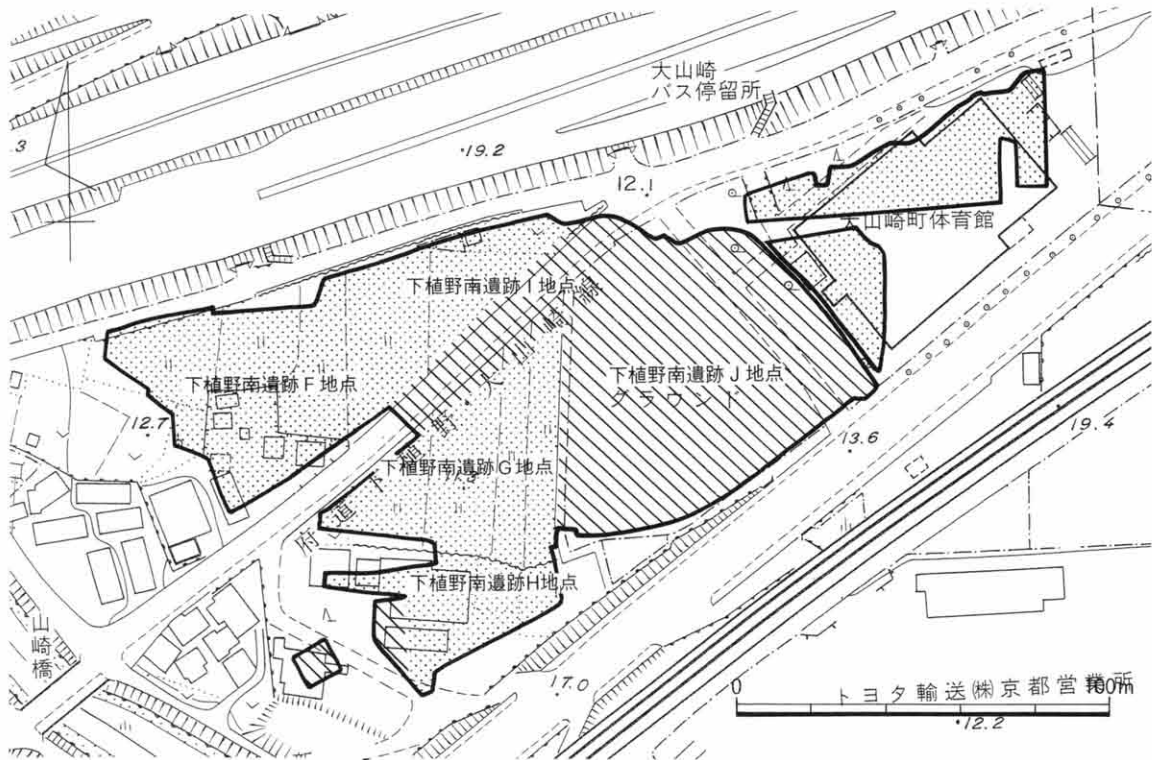
名神高速自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴う下植野南遺跡の発掘調査は平成9年度に開始し、平成12年度までで門田地区の約25,000㎡の調査をほぼ終了している。これまでの発掘調査成果については『京都府遺跡調査概報』<sup>(注1)</sup>、『京都府埋蔵文化財情報』<sup>(注2)</sup>で略述しているように上層遺構として竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など集落を中心とした遺構を、その下層遺構として方形周溝墓を中心とした墓域を確認している。平成12年度における調査成果のうち、特に下層遺構については『京都府埋蔵文化財情報』第78号の「下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣」、第79号の「方形周溝墓の被葬者—下植野南遺跡の調査から」で方形周溝墓の概略と一部その性格について詳述している。

今回の報告では方形周溝墓が造られなくなって以後、主に黒褐色粘質土が厚く堆積したのちにこの地で営まれた集落の様相についてその一部を紹介する。なお、下植野南遺跡では門田地区周辺での発掘調査<sup>(注3)</sup>が現在も進行中であり、門田地区を含めた調査地での出土遺物については十分に整理作業が進んでいないため、今回報告するものが、整理作業がすすめば一部変更される可能性があることをことわっておきたい。



第1図 調査地位置図

1. 鳥居前古墳 2. 石倉遺跡 3. 脇山遺跡 4. 大縄遺跡 5. 南栗ヶ塚遺跡 6. 葛原親王屋敷跡  
7. 裕遺跡 8. 境野古墳群 9. 西法寺遺跡 10. 円明寺跡 11. 久保川遺跡 12. 黒後古墳 13. 金蔵遺跡  
14. 松田遺跡 15. 宮脇遺跡 16. 山崎城跡 17. 百々遺跡 18. 算用田遺跡 19. 下植野南遺跡



第2図 下植野南遺跡調査区位置図

## 2. 上層遺構の概要

(1) 検出状況 下植野南遺跡の門田地区では標高10.5m前後で中世遺物を少量含む灰褐色粘質土が厚さ20~50cm堆積しており、この灰褐色粘質土層を除去した段階で検出できる遺構を上層遺構として一括呼称している。

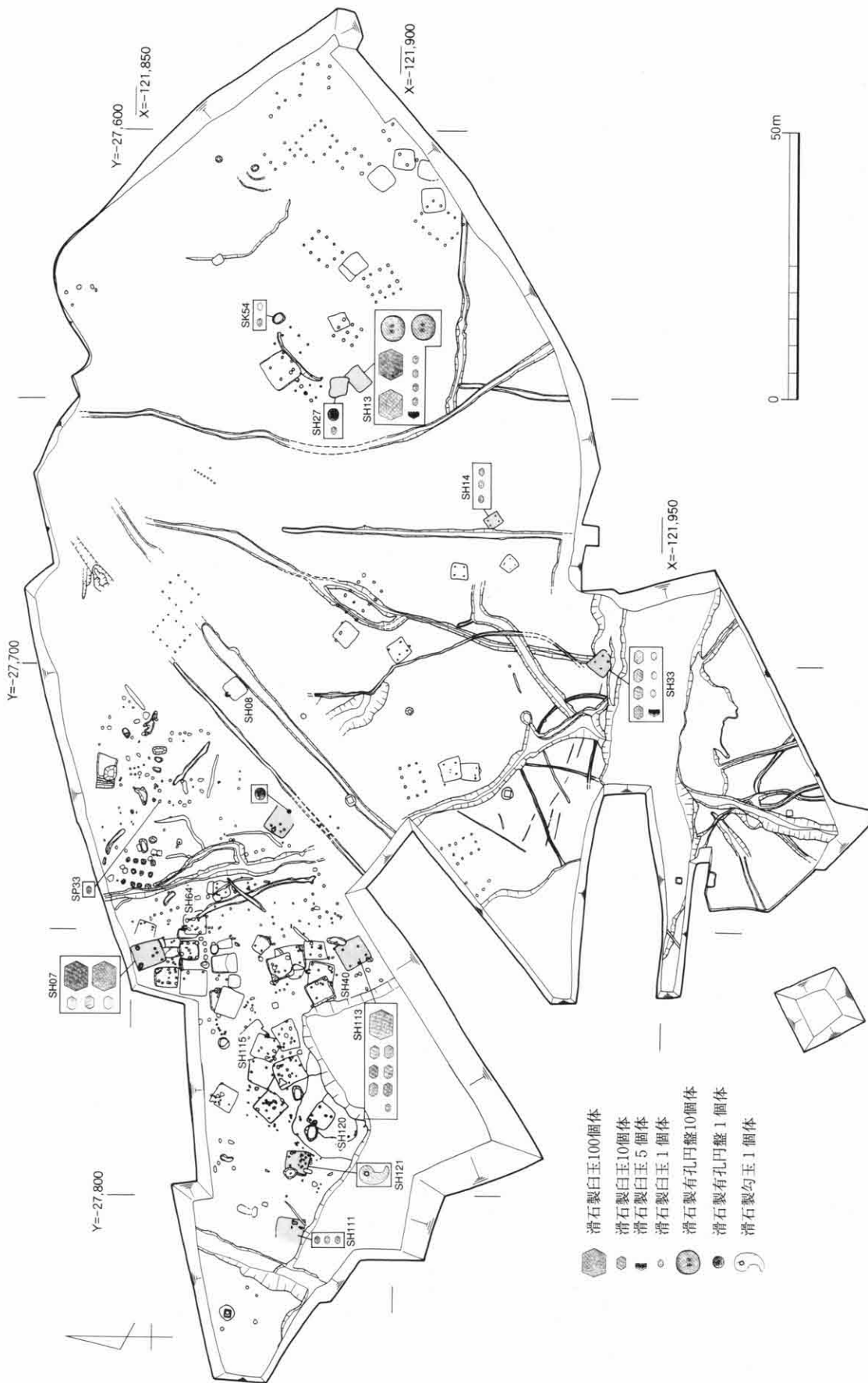
この上層遺構には中世の土師器皿、瓦器椀などを含む小溝群のほか、現府道直下の調査部分では久我畷<sup>(注4)</sup>に関連した両側溝などを検出しているが、中世段階の遺構が灰(あるいは青灰)褐色粘質土を埋め土としているのに対して中世以前の古墳時代中・後期(須恵器出現以降)や奈良・平安時代の遺構は主に暗褐色粘質土を埋め土とするものが多い。中世以前の遺構の埋め土と検出面のベース面とは近似した土質、色調であり、遺構検出作業は困難をきわめた。



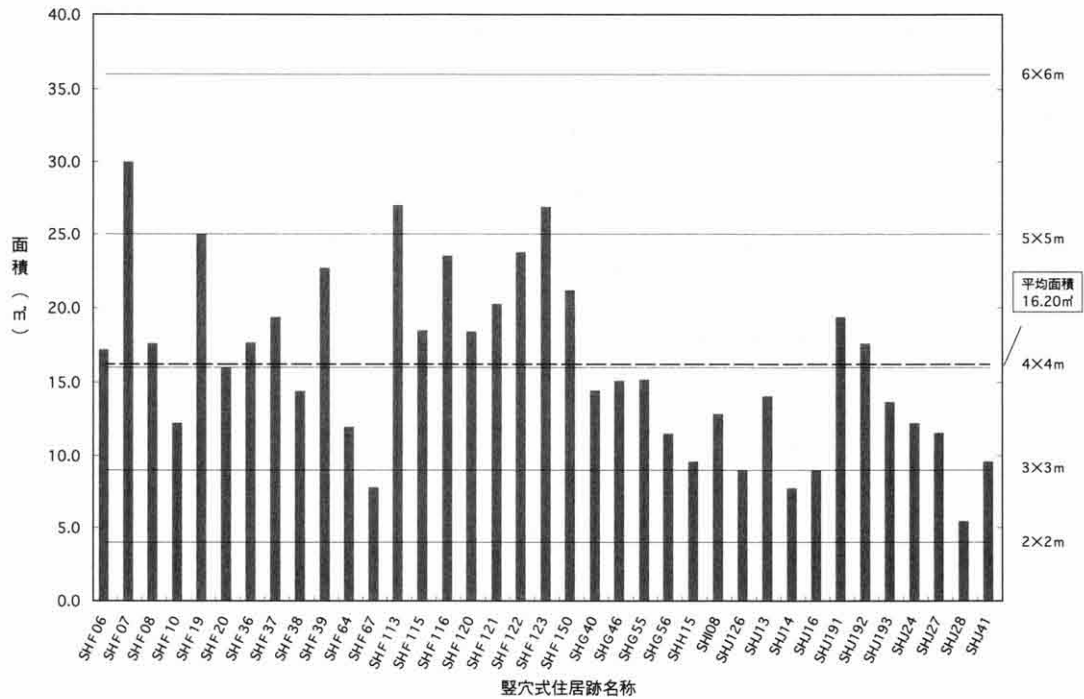
第3図 SH J 191~194完掘状況(北から)

(2) 竪穴式住居跡 上層遺構は前述のように土質が近似していることから、主に古墳時代中・後期の遺構は須恵器の散布している地点を中心に精査を加えた結果、どうにか竪穴式住居跡として捉えた遺構である。

古墳時代中・後期の竪穴式住居跡は第1表のとおり、45基前後を数える。各竪穴式住居跡は上面が大きく削り取られており、遺構検出面から住居跡の床面まで



第4図 下植野南遺跡上層遺構配置図



第5図 竪穴式住居跡床面積比較図

の深さは10cm前後と浅く、遺構の残り具合は良くなかった。

各竪穴式住居跡は方形住居で、その規模は一辺約4m前後を測り、床面には焼土を検出するものと竈を有するものがある。竈の位置は北辺にあるものが3基(SHF40、SHF64、SHI08)、北西辺にあるものが1基(SHF120)、南東辺にあるものが1基(SHF115)で、竈の位置に統一性はない。

床面の周壁溝は調査地南東(J地点)で明瞭に残るものがあるが、調査地北東(F地点)では床面の遺存状態が悪いため周壁溝が明瞭にめぐるものはない。主柱穴は4本柱を基準としているが各床面では小ピットが多く、かつ主柱穴も浅いため主柱穴が明確でないものもある。ちなみに下層遺構である古墳時代前期の竪穴式住居跡(SHF174など)では遺構検出面から床面まで50cm前後



第6図 SHJ191・SBJ183完掘状況(南西から)

を測り、周壁溝は明瞭に四周し、主柱穴も深さ50cmを測る。

竪穴式住居跡出土遺物には須恵器、土師器のほか製塩土器があり、一部の竪穴式住居跡では滑石製品(白玉・有孔円盤・勾玉)も出土している。その時期は須恵器の型式名<sup>(注5)</sup>でTK216型式からTK10型式の時期までであり、その中心はMT15、TK10型式併行期に求めることができる。

第1表 竪穴式住居跡規模一覧

地区	遺構番号	規模(m)		方位	床面積 (㎡)	焼土及び 竈の有無	時期	共伴遺物
		東西	南北					
C-1, 2	SHF06	4.0	4.3	N30° E	17.2			
96, 97, 98-B, C	SHF07	5.0	6.0	N18° W	30.0	焼土塊	TK10	白玉 (230点) 鉄製品
97, 98-A, B	SHF08	4.0	4.4	N3° E	17.6		TK23	
99-B, C	SHF10	3.6	3.4	N2° W	12.2		TK10	
99, 1-A, B	SHF19	5.0	5.0	N3° E	25.0		TK216	白玉 (2点)
1-B	SHF20	3.2	3.2	N9° W	16.0			
97-C	SHF25	2.8+ $\alpha$	3.4	N20° E	9.5		TK208	
3, 4-B, C	SHF36	4.2	4.2	N19° W	17.6	焼土塊	TK23・47	
5, 6-A, B	SHF37	4.4	4.4	N22° W	19.4		MT15	
4-C	SHF38	3.6	4.0	N0°	14.4		MT15	
4, 5-B, C	SHF39	4.2	5.4	N10° W	22.7	北辺有	MT15	
5, 6-B	SHF40	4.8+ $\alpha$	4.8	N14° E	23.0	焼土塊	MT15	
2, 3-GH	SHF61	4.4	3.8+ $\alpha$	N30° E	16.7			
99, 1-C, D	SHF64	3.0	4.0	N18° W	12.0	北辺有	MT15	
3-C	SHF67	3.0	2.6	N37° E	7.8			
4, 5-Zr, Zs	SHF111	2.6+ $\alpha$	5.0	N7° E	13.0		TK216	白玉 (3点)
5, 7-B, C	SHF113	5.0	5.4	N28° W	27.0		MT15	白玉 (161点) 鉄鏃
2, 3-Zx	SHF115	4.2	4.4	N20° E	18.5	北東辺	MT15	
4, 5-L, M	SHF116	5.6	4.2	N14° W	23.5		MT15・TK10	
4, 5-Zv, Zw	SHF120	4.6	4.0	N28° E	18.4	北西辺	TK208 (ON46)	
4, 5-Zt, Zu	SHF121	4.6	4.4	N5° E	20.2	焼土塊		勾玉 (1点)
1, 2-Zz, A	SHF122	5.4	4.4	N23° E	23.8	焼土塊		
3, 4-Zx, Zy	SHF123	4.8	5.6	N23° W	26.9	焼土塊	MT15	
3, 4-Zv, Zw	SHF150	4.6	4.6	N41° E	21.2		MT15	
2, 3-Zx	SHF151	4.4+ $\alpha$	4.2	N21° E	18.5		MT15	
1-A	SHF154	3.8	1.8+ $\alpha$	N14° W			以下現在整理中	
15-M, N	SHG33	4.2	?	N36° E		焼土塊		白玉 (48点)
7, 8-N	SHG40	3.8	3.8	N34° W	14.4			
5, 6-M, N	SHG46	4.2	3.6	N45° E	15.1			
12, 13-E, F	SHG54	5.4	5.4+ $\alpha$	N38° E				
9, 10-I, J	SHG55	3.8	4.0	N15° W	15.2			
10, 11-I, J	SHG56	3.2	3.6	N5° E	11.5			
20, 21-K	SHH15	3.0	3.2	N20° W	9.6			
1, 2-M	SHI08	3.9	3.3	N42° W	12.9	有り		
3-X, Y	SHJ126	3.0	3.0	N41° W	9.0	有り		
6-X	SHJ13	4.4	3.2	N40° E	14.1			白玉 (209点) 有孔円盤 (20点) 剣形石製品 (2 点) 石製品 (1点) 剝片 (1点)
11-S	SHJ14	2.5	3.1	N33° W	7.8			白玉 (3点)
10-Q	SHJ16	3.0	3.0	N9° E	9.0			
8, 9-AE	SHJ191	4.4	4.4	N5° W	19.4			
6, 7-AE, AF	SHJ192	4.0	4.4	N44° W	17.6			
7, 8-AF, AG	SHJ193	3.8	3.6	N3° E	13.7			
8-AF	SHJ194	3.2	2.6+ $\alpha$	N7° E				
5, 6-AB, AC	SHJ24	3.5	3.5	N43° W	12.3			
5-X	SHJ27	3.4	3.4	N6° W	11.6			白玉 (1点)
11, 12-Q, R	SHJ28	2.6	2.1	N37° E	5.5			
5-Z	SHJ41	3.1	3.1	N24° W	9.6			
1-AB, AC	SHJ49	1.1+	2.2	N24° W				
5, 6-AB, AC	SHJ53	3.5	1.2+	N43° W				

整理作業が進んでいないため、規模・時期など今後変更する可能性がある。

第2表 掘立柱建物跡規模一覧

地区	遺構番号	規模(m)		建物の形態		方位	備考
		東西	南北	間数	種別		
99-C	SBF155	3.4	3.8	2×3	南北棟	N3° 未満	
97,98-E, F	SBF91	5.6	5.8	2×3	総柱	N8° E	
97,98-H, I	SBF92	4.2	7.6	2×4	南北棟	N3° W	
98,99-D, E	SBF96	3.4	6.2	3×4	南北棟	N23° W	
5,6,7-P, Q	SBG47	7.4	4.8	2×4	南北棟	N44° E	
7,8-I, J	SBG83	6.4	4	2×3	東西棟	N15° W	
9,10-F, G	SBH14	3.8+ $\alpha$	4.1+ $\alpha$	2?×2?	南北棟	N23° W	
10-F, G	SBH15	4	3.4	2×2	南北棟	N30° W	
97,98-N, O	SBI05	4.5	5.5	3×3	東西棟	N42° E	
99,1-P, Q	SBI06	4.5	5	2×3	東西棟	N44° E	
5-G, H	SBI40	2.4	2.4	1×1	?	N45° W	
5,6-D, E	SBJ107	3.3	3.9	2×2	総柱	N33° E	
3,4-Y, Z	SBJ142	4.3	4.5	2×2	東西棟	N43° E	SBJ123と同一建物
4-W, X	SBJ167	3.7	4.1	2×2	東西棟?	N13° E	
2,3-AF, AG	SBJ178	3.6+ $\alpha$	4.4	2?×2	南北棟	N37° W	
3-AH, AI	SBJ179	4+ $\alpha$	2+ $\alpha$	1?×2?	南北棟	N39° E	
4,5-AI, AJ	SBJ180	6.2	4.6	2×3	東西棟	N5° E	
4,5-AF, AH	SBJ181	5	6	3×4	南北棟	N41° E	
5,6-AF, AG	SBJ182	4	4	2×2	東西棟	N48° W	
8,10-AC, AE	SBJ183	5	7.4	3×4	東西棟	N43° E	
7,8-AF, AH	SBJ197	7.8	3+ $\alpha$	1?×3	東西棟	N37° W	
6,7-AA, AB	SBJ21	3.5(5)	5.5	2×3	南北棟	N30° W	西庇を持つ南北棟
1,2-L, M	SBJ45	4	6	2×3	東西棟	N42° E	

(3)掘立柱建物跡 上層遺構には数多くのピットがあり、これらのピットは掘立柱建物跡としてまとまるかどうか現在検討中である。ただ、現地調査時の知見でみると、門田地区で掘立柱建物跡としてまとまるものは23棟を数える。各掘立柱建物跡の規模などは第2表のとおり2間×2間、2間×3間のものが各6棟と多く、最大規模のものでも3間×4間までで小規模なものが大半である。各掘立柱建物跡の掘形規模は直径約20cm前後のものが多く、総柱で3間×2間のS B F 91と3間×2間で西に1間の庇をもつS B J 21では、掘形の直径約50cmを測りやや規模が大きくなる。

各掘立柱建物跡の掘形および柱穴から出土する遺物は皆無かあるいは小片のものが大半であり、かつ整理作業も進んでいないため、その時期については十分に検討しえる段階ではないが明らかに竪穴式住居跡の時期の土器が柱穴や掘形内から出土しているものもある。また検出遺構の切り合い関係から竪穴式住居跡の埋没後に掘立柱建物跡が造られているものもある。

(4)その他の遺構 竪穴式住居跡、掘立柱建物跡のほかに溝状遺構、土坑などがある。溝状遺構の多くが、調査地を南北方向に縦断するように掘り込まれているものが多く、S D F 22(S R G 01も同一遺構)では埋め土の上層で一部奈良時代の遺物を含むがその多くは古墳時代の須恵器・土師器を含み、竪穴式住居跡の時期と同時期に機能していた溝と思われる。

S D J 01は古墳時代の遺物を含まず奈良時代の土器が出土しており、掘立柱建物跡の時期に機

能していたものと思われる。

土坑には奈良時代の土器を含む明確なものはなく、その大半は古墳時代のものと思われ、特にSKF54ではいくつかの竪穴式住居跡から出土した土器と同時期の土器のほか滑石製白玉も出土している。

古墳時代前期の竪穴式住居跡に伴う井戸の検出例はあるが、古墳時代中・後期の時期の竪穴式住居跡に伴う明確な井戸の検出例はない。

### 3. 予察として

下植野南遺跡(門田地区)では、その一部を2001年度に残しつつもほぼ発掘調査は終息に向かっており、今後報告書作成にむけて整理作業を行う予定である。今後の整理作業の結果ではこれまで記述していることが変更される可能性も多々あるが、現発掘調査時点での上層遺構についてその概略を紹介した。

竪穴式住居跡はいずれも方形で、床面平均面積は16.2㎡であり、大きく突出した規模のものはなく、大山崎体育館・名神拡幅工事に伴う下植野南遺跡の様相と同様のものである。竪穴式住居跡の床面には焼土が残り炉跡と思われるもののほか、支脚に土器や石を利用している造り付け竈をもつものがある。造り付け竈を有する竪穴式住居跡はMT15型式の時期のものが主体であるが、TK208型式の時期あるいは須恵器出現以前の時期まで遡る可能性のあるものもある。

出土遺物の整理作業やその検討が十分でないため、一時期(例えばTK23・47型式の時期)に何基の竪穴式住居跡が同時併存していたのかは明らかでないが、床面から出土した遺物、竪穴式住居跡の床面の方位関係、竪穴式住居跡の切り合い関係などから今後明らかになるものと思われる。ただ、大きくは門田地区での竪穴式住居跡の配置状況をみると、調査地を南北に縦断する溝SDF22を境にその東部では検出した竪穴式住居跡の2/3以上を数え、その一部には重複した状態で検出しており、竪穴式住居跡が密集している。一方、溝SDF22の東側では調査地の南東端でやや密集度が高くなるが、概して竪穴式住居跡の配置傾向は散発的であり、須恵器の古相の時期には竪穴式住居跡は散発的であるものが、新相の時期には調査地の北西方向に集中する傾向にあるものと思われる。掘立柱建物跡の中には竪穴式住居跡と同時期のものも含まれる可能性もあるが、その大半は奈良時代以降のものと思われる。

掘立柱建物跡は竪穴式住居跡とは異なり、調査地の北半部でとぎれるSDJ01を境に西側では散発的であるが、東側ではややまとまって検出している。

(いしい・せいじ=当センター調査第2課調査第4係主任調査員)

注1 ア、戸原和人、岩松保「長岡京右京第585次(7ANSKT-3地区)・下植野南遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

イ、石井清司・竹下士郎・中村周平・藤井整・尾上忍「名神大山崎町ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要 長岡京右京第589次・下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査概要』第90冊 (財)



- 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999  
ウ、松井忠春・石井清司・藤井整・中島史子・尾上忍・今林信祐「名神大山崎町ジャンクション関係遺跡平成11年度発掘調査概要 下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査概要』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注2 ア、竹下士郎「下植野南遺跡(下層)の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第71号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999  
イ、野島永・魚津知克「下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000  
ウ、藤井整「方形周溝墓の被葬者-下植野南遺跡の調査から」(『京都府埋蔵文化財情報』第79号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注3 下植野南遺跡では周辺調査では、東隣りの大山崎町体育館建設に伴う長岡京右京第188次調査、名神拡幅工事に伴う調査側が終了し、報告書も刊行されている。また現在門田地区とは国道171号線を挟んで南の五条本地区・土辺地区で発掘調査が行われている。すでに刊行されている報告書には以下のものがある。  
ア、林亨・近澤豊明・中塚良『下植野南遺跡-長岡京跡右京第188次調査報告』大山崎町埋蔵文化財調査報告第13集 大山崎町教育委員会 1996  
イ、中川和哉ほか『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注4 平安時代以降、長岡京までは条里型地割が残っており、この条里型地割とは方位を異にして大山崎から久我まで斜めに直線があり、これが久我啜(こがなわて)と呼ばれている。  
参考文献には大山崎町歴史資料館第7回企画展図録『西国街道と大山崎』(1999)などがある。
- 注5 田辺昭三『須恵器大系』(角川書店) 1981

# 弥生墳墓やよいふんぼにおけるやりがんな 鈿の副葬作法について(2)

～但馬・丹波地域～

福島 孝行

## 1. はじめに

前稿で私は丹後の弥生墳墓における鈿副葬作法について検討し、被葬者の上半身右側が副葬位置の原則であったことを明らかにした上で、上半身右側を強く意識しながらも徐々に足元や左側へ分散する状況を具体的に示した<sup>(注1)</sup>。また、鈿副葬の故地を朝鮮半島、特に洛東江流域に求め、半島との直接的な交渉の可能性を指摘した。今回は前稿を受けて丹後地域と並んで早くから鉄製鈿を副葬し、弥生後期の間、盛んに副葬し続ける但馬地域を取上げることとする。また、丹後・但馬地域の南に隣接する丹波地域<sup>(注2)</sup>の状況も合わせて取り上げる。

## 2. 但馬地域における鈿の副葬配置

### (1) 各事例の検討

#### 1) 上鉢山・東山墳墓群<sup>(注3)</sup>

後期初頭～前葉に8主体で副葬している。後期初頭では棺内頭部右側(1AR-h類)1例、棺上頭部寄り(2 $\alpha$ -h類)1例、後期前葉では棺内頭部右側(1AR-h類)2例、棺上頭部寄り(2 $\alpha$ -h類)2例、棺上中央寄り(2 $\alpha$ -c類)1例、他に棺上(2 $\alpha$ 類)1例がある。後期前葉ですでに棺外棺上である2 $\alpha$ 類が1AR-h類を凌駕し、地域色が発現している。

#### 2) 加陽土屋ヶ鼻墳墓群<sup>(注4)</sup>

後期中葉から後期末にかけての墳墓群であるが、後期中葉、もしくは墳墓内で後期中葉の土器を出土する主体部では、棺内頭部右側(1AR-h類)3例、棺上足元寄り(2 $\alpha$ -1類)1例、棺外の裏込め土下が1例ある。棺外裏込め土下の例は前稿の分類基準に無いため、2 $\gamma$ 類とする。

後期末では棺内頭部右側(1AR-h類)1例、棺内頭部左側(1AL-h類)2例、棺内足元右側(1AR-1類)1例、棺内足元左側(1AL-1類)2例、棺上頭部寄り(2 $\alpha$ -h類)が1例見られる。

#### 3) 立石墳墓群<sup>(注5)</sup>

後期後葉の立石墳墓群では103号地点G群第32主体で、棺上足元寄り(2 $\alpha$ -1類)1例が1例ある。

#### 4) 本井墳墓群<sup>(注6)</sup>

後期後葉から古墳前期にかけて築造された弥生墳墓群～古墳群であるが、後期後葉の1号墓第4主体で棺内頭部右側(1AR-h類)1例ある。なお、古墳前期の3号墳第1主体は棺内中央部足元寄り(1AC-1類)である。

第1表 但馬地域における鉦副葬配置

墳墓群	墳墓名	主体部名	出土位置(点数)	切先の方向	頭位	時期	階層
上鉢山・東山墳墓群	4号墓	第2主体	1AR-h(1)	頭部	南	後期初頭	
上鉢山・東山墳墓群	4号墓	第6主体	2α-h(1)	頭部	西	後期初頭	
上鉢山・東山墳墓群	1号墓	第7主体	1AR-h(1)	頭部	西	後期前葉	
上鉢山・東山墳墓群	3号墓	第1主体	2α-c(1)	不明	不明	後期前葉	溝内埋葬
上鉢山・東山墳墓群	4号墓	第4主体	2α-h(1)	右	北	後期前葉	
上鉢山・東山墳墓群	4号墓	第13主体	2α-h(1)	不明	南	後期前葉	
上鉢山・東山墳墓群	4号墓	第16主体	1AR-h(1)	爪先	南	後期前葉	
上鉢山・東山墳墓群	4号墓	第17主体	2α-c(1)	中央部	東	後期前葉	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	2号墓	第1主体	1AR-h(1)	不明	東	後期中葉	中心主体
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	7号墓	第3主体	1AR-h(1)	頭部	北西	後期中葉	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	3号墓	第1主体	2α-l(1)	足元	南	後期中葉?	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	6号墓	第2主体	2γ(1)	不明	北	後期中葉?	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	7号墓	第1主体	1AR-h(1)	不明	北西	後期中葉?	中心主体
立石墳墓群	103号地点G群	第32主体	2α-l(1)	不明	南	後期後葉	中心主体
本井墳墓群	1号墓	第4主体	1AR-h(1)	頭部	西	後期後葉	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	9-1号墓	主体部	2α-h(2)	爪先	南西	庄内	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	9号墓	第1主体	1AR-l(1)	不明	南西	庄内	中心主体
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	9号墓	第2主体	1AL-l(1)	頭部?	北東	庄内	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	6号墓	第6主体	1AL-l(1)	爪先	南西	庄内	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	6号墓	第9主体	1AL-h(1)	不明	北東	庄内	
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	6号墓	第10主体	1AR-h(1)	頭部	南西	庄内	中心主体
加陽土屋ヶ鼻墳墓群	3号墓	第4主体	1AL-h(1)	不明	西	庄内~布留1	
本井墳墓群	3号墳	第1主体	1AC-l(1)	頭部	西	布留2	中心主体

この他に、未報告ではあるが、門谷墳墓群でも多数出土している。

(2) 副葬位置の時間的推移

1) 後期初頭

この段階の但馬地域では1AR-h類1例と2α-h類1例であり、丹後地域と同様に共通の副葬配置を採用していると同時に、地域性が発現していることが分かる。

2) 後期前葉

後期前葉に下ると2α類が1AR類を凌駕し、但馬地域での地域性が顕在化する。しかし、棺内に納める場合は頭部の右側に納めるという規制が遵守されている。

3) 後期中葉

丹後ほどのばらつきは認められず、1AR-h類、2α-l類、2γ類の3類のみである。この段階から足元に置く例が登場し、また例外的な2γ類も出現する。

4) 後期後葉

この段階の資料は少ないが、1AR-h類と2α-l類がある。

5) 後期末

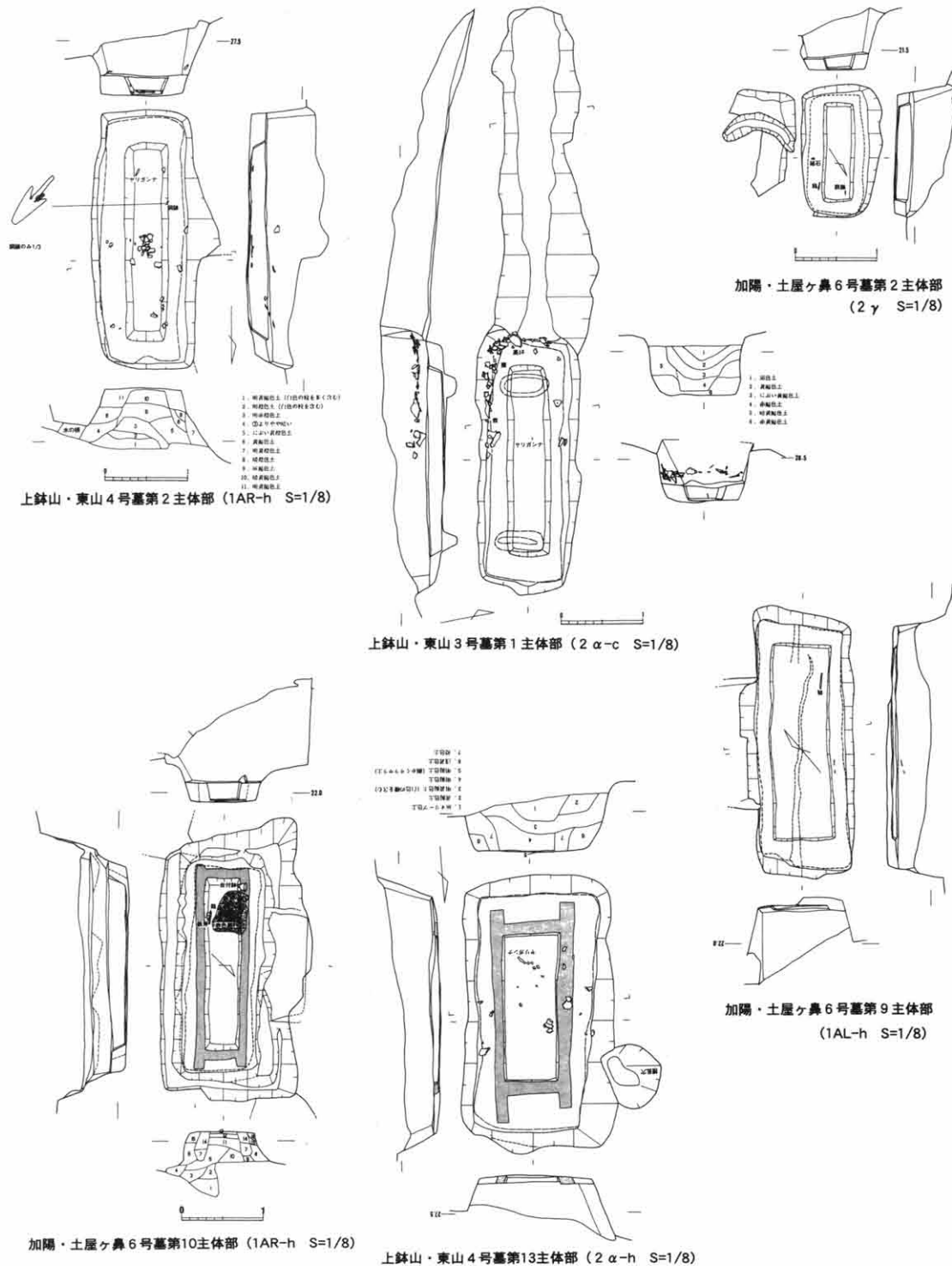
この段階になると、配置にばらつきが生じる。1AR-h類、1AL-h類、1AR-l類、1AL-l類、2α-h類の5分類となり、丹後でのあり方に近くなる。

以上見てきたように、但馬地域においては後期初頭に鉦副葬習俗が導入された直後では1AR-h類が強く遵守されるが、その後は1AR-h類と2α類が並列して存在し、後期末にはい

るとその規制は弱体化するということが明らかとなった。

(3) 階層構造と副葬位置

後期中葉の中心主体では1AR-h類のみであるが、後期後葉になると2α-1類が加わり、後期末には1AR-l類も加わる。中心主体では後期中葉までは1AR-h類の規制を遵守するものの、後葉からは守られなくなる状況が読みとれる。2α類は後期前葉の溝内埋葬からも見つ



第1図 但馬地域の鉤副葬例(上が頭位)

第2表 但馬地域における分類別変遷表

	1類					2類				γ類
	A類					α類				
	R類		C類	L類						
	h類	l類	l類	h類	l類	h類	c類	l類		
後期初頭	1					1				
後期前葉	2					2	1			
後期中葉	2							1	1	
後期後葉	1							1		
後期末	1	1		2	2	1				
古墳前期			1							
細分の合計	7	1	1	2	2	4	1	2	1	
左右別合計	8		1	4						
棺内外の合計	13					8				

かっており、当初はやや低い階層から取り入れられたものであると考えられる。

### 3. 丹波地域における鉦副葬配置

#### (1) 各事例の検討

##### 1) 中丹地域

中丹地域と呼ばれる由良川流域は、丹後の墓制と関連づけられて語られることが多いが、鉦の副葬に関してはその

開始が大きく遅れる地域である。しかも現状では豊富谷丘陵遺跡群と宝蔵山古墳群の2遺跡4例に限られる。

京都府福知山市宝蔵山古墳群<sup>(注7)</sup>は弥生時代後期から古墳時代前期にわたって造営され続ける墳墓遺跡であるが、鉦は4号墳第1主体部から出土した。4号墳は庄内式併行期に築造された墳墓である。出土位置については不明である。

同市豊富谷丘陵遺跡群<sup>(注8)</sup>では、谷尾谷3号墳主体部、論田2号墳第3主体部、大道寺4号墳第1主体部で出土した。これらはともに庄内式併行期に造営された墳墓である。

谷尾谷3号墳主体部では棺上足元寄り(2α-1類)に置かれ、論田2号墳第3主体部では棺内の頭部左側(1AL-h類)に置かれている。また大道寺4号墳第1主体部では棺内の足元右側(1AR-1類)に置かれている。

##### 2) 兵庫丹波地域

由良川流域と境を接する兵庫丹波地域には2遺跡5例が検出されている。

兵庫県西紀町内場山墳丘墓<sup>(注9)</sup>ではSX-10、SX-11、SX-14の3主体部から出土した。SX-10は棺内の上半身右側(1AR-b類)に、SX-11は棺内頭部右側(1AR-h類)に置かれていた。SX-14は棺内から出土したが、詳細は不明である。

兵庫県青垣町ボラ山1号墳<sup>(注10)</sup>では第1主体部、第2主体部から出土した。第1主体部では棺内頭部右側(1AR-h類)に置かれていた。第2主体部では棺上頭部寄り(2α-h類)に置かれていた。内場山墳丘墓、ボラ山1号墳はともに庄内式併行期の墳墓であるが、ボラ山墳墓群の方がやや新相である。

##### 3) 南丹波地域

南丹波における弥生墳墓で鉦が検出された例はわずかに1件である。

京都府園部町狭間2号墓第1主体部<sup>(注11)</sup>では、棺上頭部寄り(2α-h類)に置かれていた。2号墓は供献土器から後期後半の築造であると考えられる。

#### (2) 副葬位置の時間的推移

第3表 丹波地域における鉤副葬配置

墳墓群	墳墓名	主体部名	出土位置(点数)	切先の方向	頭位	時期	階層
宝蔵山古墳群	4号墳	第1主体	不明(1)	不明	不明	庄内	
谷尾谷墳墓群	3号墳	主体部	2 $\alpha$ -1(1)	足元	南西	庄内	
論田墳墓群	2号墳	第3主体	1AL-h(1)	不明	南西か	庄内	
大道寺墳墓群	4号墳	第1主体	1AR-1	不明	東	庄内	
内場山墳丘墓		SX-10	1AR-b	頭部	北東	庄内	中心主体
内場山墳丘墓		SX-11	1AR-h(1)	頭部	北西	庄内	
内場山墳丘墓		SX-14	棺内(1)	不明	南東	庄内	
ボラ山墳墓群	1号墓	第1主体	2 $\alpha$ -h(1)	頭部	北	庄内	中心主体
ボラ山墳墓群	1号墓	第2主体	2 $\alpha$ -h(1)	左+右	北	庄内	
狭間墳墓群	2号墓	第1主体	2 $\alpha$ -h(1)	頭部	東	後期後葉	中心主体

後期後半に南丹波で2 $\alpha$ -h類、庄内式併行期に中丹で1AR-1類、1AL-h類、2 $\alpha$ -1類、兵庫丹波で1AR-h類、1AR-b類、2 $\alpha$ -h類が見られる。

2 $\alpha$ 類が但馬地域において独自に展開する類型であることから、遅れて副葬が開始される丹波地域での同類型の墳墓は但馬地域の影響を見るべきであろう。中丹地域でのあり方は丹後の影響下と見ることは可能であるが、2 $\alpha$ -1類の存在を考えると但馬地域の影響も存在すると考えられる。兵庫丹波の内場山墳丘墓は棺上に配置する2 $\alpha$ 類が見られず、但馬地域より丹後

第4表 丹波地域における分類別変遷表

	1類			2類		
	A類			$\alpha$ 類		
	R類		L類			
	h類	b類	l類	h類	h類	l類
後期初頭						
後期前葉						
後期中葉						
後期後葉						1
後期末	1	1	1	1	2	1
古墳前期						
細分の合計	1	1	1	1	3	1
左右別合計	3			1	4	
棺内外の合計	4			4		

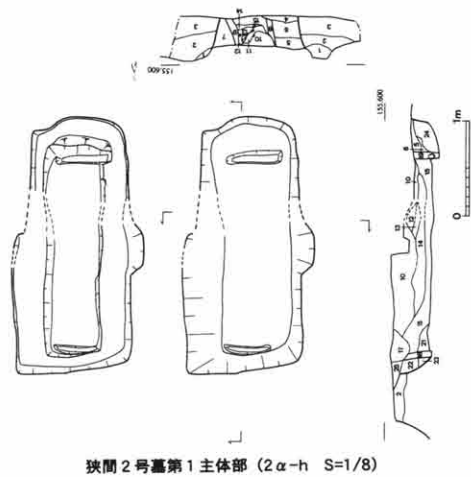
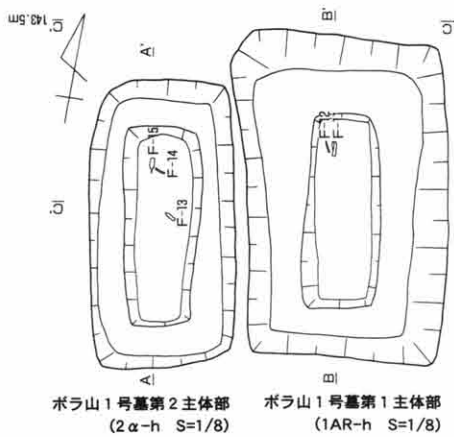
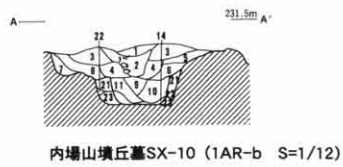
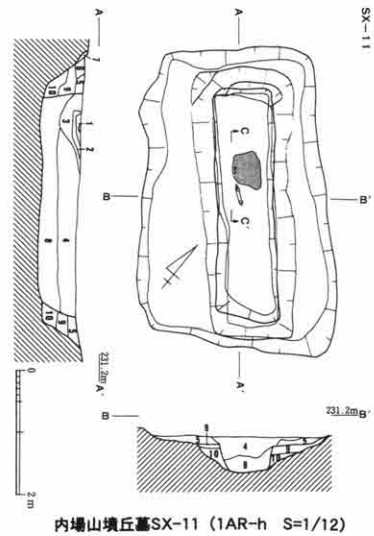
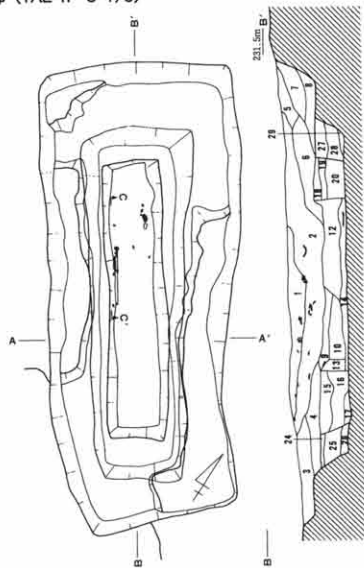
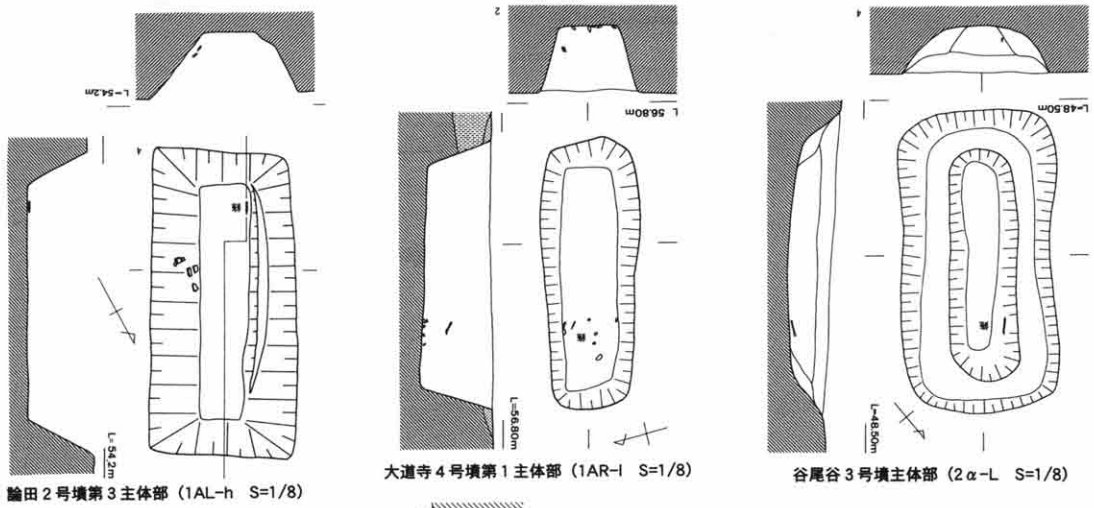
地域の状況に近い。内場山墳丘墓は後に中世山城造成時の削平によって改変を受けている可能性も否定できないが、拙稿で提唱した赤坂今井グループの墳墓である可能性が高い。<sup>(注12)</sup>もしそうなら、兵庫丹波に一時的に丹後地域の強い影響が及んだ結果、地理的により近い但馬的な規制を排除して、丹後的な規制を受け入れていると考えることができる。しかしその後は但馬的な規制が強くなっている。

### (3)階層構造と副葬位置

丹波3地域とも中心主体、副次的主体ともに鉤を副葬しており、内場山墳丘墓では中心主体部、副次的主体部ともに1AR類が見られるが、ボラ山1号墳では双方とも2 $\alpha$ -h類となっている。

## 4. まとめ

但馬地域では、丹後地域と比較して強い共通の副葬配置が後期後葉まで続いていたことが浮彫りとなった。また丹後地域と共通の副葬配置である、棺内に棺側と平行して被葬者の右側頭部寄りに置くという1AR-h類と但馬地域独自の棺蓋上に置く2 $\alpha$ 類が比較的早い段階から共存し、2 $\alpha$ 類は下位の階層から導入される状況も明らかとなった。



第2図 丹波地域の鈍副葬例(上が頭位)

丹後地域で指摘したように完成された強い共通の副葬配置が導入期に見られ、時期が下ると規制が弛緩する状況は別地域で成立した墓制の移入と見られる。但馬地域でもこの状況は看取され、また上位階層では丹後と共通の副葬配置を遵守し続けるが、下位の階層では早い段階から地域性が発現する但馬地域の状況は、先の指摘を更に裏付ける傍証となる。したがって、但馬地域の墓制における鉤副葬習俗は丹後地域と同様に他地域からもたらされたものである可能性が極めて高い。そしてその故地はやはり前稿で指摘したように朝鮮半島南部の洛東江流域であろう。なお、丹後・但馬地域で普遍的に副葬される鉤は柄の部分に裏すきがない平坦なものであるが、朝鮮半島において出土する鉤は北部九州で出土する柄の部分にも裏すきが見られるものである。裏すきのない鉤は現在のところ老圃洞墳墓群<sup>(注13)</sup>、良洞里古墳群<sup>(注14)</sup>など、朝鮮半島南部に限られる。こうした状況からも丹後・但馬地域における鉤副葬習俗は朝鮮半島南部の洛東江流域からもたらされたという指摘を裏付ける傍証となる。

丹後・但馬地域にとって周辺地域である丹波地域においては小地域ごとに鉤副葬における配置の受け入れ方が異なる。中丹地域では丹後の副葬配置に但馬の副葬配置が加わるあり方を示し、兵庫丹波では当初丹後の副葬配置を受け入れているが、後に但馬の副葬配置に変更される。南丹波は1例のみであるため但馬の副葬配置が見られるとしかいえない。

以上但馬、丹波地域の鉤副葬における配置の状況を見てきたが、後期初頭において丹後と但馬は同一の配置における共通の副葬配置を持っていたことが明らかとなり、同時に但馬は独自の配置を案出し、周辺地域にも影響を与えたことが明らかとなった。また、赤坂今井グループの勢力圏の拡大に伴って墳丘形態、木棺形態、墓壙配置のみならず、副葬品の配置まで周辺地域に影響を及ぼしている可能性が高まった。

鉤という1工具の副葬の仕方にこだわってみたが、そこには一定の共通の副葬配置が存在し、墓制において等質的に見える丹後と但馬の間でさえ、地域性が存在することが明らかとなった。また鉤の副葬そのものが全国的に見ても特異な現象であり、周辺地域に影響を及ぼしている状況も垣間見ることができた。

また丹後・但馬で副葬に関する配置法が緩む頃、北部九州の石棺墓を中心に急速に鉤副葬が普及する。この現象が直ちに丹後・但馬の影響であるとはいえないが、可能性の一つには挙げられよう。ただし、北部九州と朝鮮半島との関係の深さ、鉤の柄の部分にまで裏すきを持つという形態的特徴を考慮すれば、朝鮮半島からの直接的な影響の可能性も高い。

今後朝鮮半島での事例を収集し、朝鮮半島での配置の共通性の有無および実体を明らかにした上で、丹後・但馬地域との比較検討をしていきたい。

(ふくしま・たかゆき＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 福島孝行「弥生墳墓における鉤副葬作法について(1)－丹後地域－」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

注2 丹波地域とは旧国名の丹後分国後の丹波国に相当する地域名であり、中丹波、兵庫丹波、南丹波の



3地域からなる。

- 注3 瀬戸谷皓『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市教育委員会 1992
- 注4 瀬戸谷皓『加陽土屋ヶ鼻遺跡群』豊岡市教育委員会・豊岡市立郷土資料館 1992
- 注5 瀬戸谷皓『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会 1987
- 注6 瀬戸谷皓『本井墳墓群・尼城址』豊岡市教育委員会 1988
- 注7 堤圭三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1967  
常盤井智行「長田野周辺の古墳」(『丹波の古墳Ⅰ』山城考古学研究会) 1983
- 注8 堤圭三郎ほか『豊富谷丘陵遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注9 岡崎正雄ほか『内場山城跡』兵庫県教育委員会 1993
- 注10 徳原多喜雄『ブラ山・ボラ山』青垣町・氷上郡教育委員会 1995
- 注11 引原茂治・福島孝行『京都府遺跡調査概報』第97冊 2001
- 注12 福島孝行「赤坂今井墳丘墓にみる階層制について」(『京都府埋蔵文化財情報』第76号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注13 釜山大学校博物館『釜山老圃洞遺蹟』(釜山大学校博物館遺蹟調査報告12) 1988
- 注14 村上恭通「日本海沿岸地域における鉄の消費実態－弥生時代後期を中心として－」(『古代文化』Vol.53) 2001

## 古代の官衙と官道

伊野 近富・村田 和弘

### 1. はじめに

伊野・村田両名は、平成8～9年度にかけて「古代の官衙と官道」というテーマで、当調査研究センターの共同研究事業を行った。本稿は、その成果の一部を発表するものである。

古代の官衙と官道についての研究は、全国的に見ても、ここ20年目覚ましいものがある。特に、国立歴史民俗博物館の2つの研究報告<sup>(注1)</sup>は、文献史学や歴史地理学、あるいは考古学といった分野の成果を簡潔にまとめたものである。

また、地方官衙については山中敏史氏の<sup>(注2)</sup>労作があるし、佐藤興治氏との共著『古代の役所』<sup>(注3)</sup>はわかりやすい。

道については、条里制研究会(現条里制・古代都市研究会)や、古代交通研究会での発表と、その成果報告(『条里制研究』1985年から、『古代交通研究』1992年から)が刊行されており、研究の状況を知ることができる。

今回、発表する共同研究の成果は、官衙と官道についての2種である。では、それぞれのテーマについて発表したい。

### 2. 官衙—丹後国府の復原—

#### (1) 丹波分国以前

丹後国は、奈良時代のはじめの和銅6(713)年4月に丹波国から5郡(加佐・与謝・丹波・竹野・熊野)を割いて成立した国である。北は日本海、南東の由良川から西の大江山などの山塊によって区画された地域である。

この国府は速やかに丹後国のどこかに設置されたと思われる。しかし、この所在地については、平安時代の書物である『和名類聚抄』に、「加佐郡に在り、行程上七下四日」とある他、『色葉字類抄』『延喜式』頭注が加佐郡、鎌倉時代の『拾芥抄』は加佐、与謝両郡をあげているが、具体的な地名は判然としない。

さて、分国以前の国府はどこにあったのだろうか。まず考えられることは、丹波国という国名の由来となった地にあったのだろうかということである。

この地は、分国後に丹後国丹波郡丹波郷(現中郡峰山町字丹波)となった地域である。これが分国後に丹後国内に残されたことについては、いくつかの研究がある。まず、門脇禎二氏は『古事記』『日本書紀』にある丹後の豪族の男系タテ系図を復原し、かつて、竹野川流域(現丹後町、弥

栄町、峰山町)の丹波郷に強力な勢力が存在したことを推定した。

そして、熊野郡の佐濃谷川など他の地域を含めて、この地域に丹後王国とも呼ぶべき体制があったと提唱した。

考古学的にも、この地には湧田山1号墳という前方後円墳を中心に、古墳群が形成されているが、この字丹波の地に近い大田南5号墳(弥栄・峰山町境)から青龍3(235)年銘をもつ方格規矩鏡が出土したり、丹後の日本海に近い所には、古墳時代前期に網野銚子山古墳や神明山古墳などの全長200m前後の巨大古墳が築造されたり、強力な勢力があったことがわかる。ところが、古墳時代後半になると、丹後地域には特に有力な古墳のまとまりは認められず、北丹波および南丹波にその中心が移るのである。

平良泰久氏の<sup>(注5)</sup>整理によれば、丹波国造である丹波直の勢力地は丹後に1か所、丹波に2か所(もしくは3か所)あったとされ、丹後国丹波郡、丹波国船井郡、同桑田郡がその地であった。なお、北丹波の天田郡には丹波国造の祖神を祭る延喜式内社天照玉命神社があるのに対して、南丹波の桑田郡にはそれを祭る式内社がないことから、この地が丹波国の中心となったのは、意外に新しいと考えられ、国造氏である丹波直の桑田郡移住は、国造の地域支配の実権の喪失以降、国一評制による地方行政制度の時代(7世紀)であったことを示唆していると推定した。

すなわち、分国直前の丹波国府は桑田郡にあったことになり、その結果、丹波国のかつての有力地は丹後国に遺されることとなったのである。

なお、山中敏史氏<sup>(注6)</sup>によれば、大化の改新によって律令的な国郡制が敷かれたけれども、8世紀初葉以前には独立した国司の建物、すなわち、国庁はなく、郡(評)の衙に併置されていたと推定されている。

## (2) 丹後国府推定地

丹後国府の所在地については諸説があるが、それを紹介する前に、主要な丹後国関係の古代の文献を列挙したい。

『続日本紀』和銅六年四月

乙未、割二丹波国加佐・与佐・丹波・竹野・熊野五郡一、始置二丹後国一、

『律書残篇』

丹後国郡五、郷卅九、里百十九、去レ京行程九日、介、掾、大目、五位以下也、

『和名類聚抄』

丹後国国府在二加佐郡一、行程上七下四日、和銅六年割二丹波国五郡一置二此国一、管五田四千七百五十六町百五十五歩、本領四十三万八千八百束 加佐 与謝与佐 丹波 竹野多加乃 熊野久万乃

『類聚三代格』貞観七年(865)三月

太政官謹奏(略)能登国丹後国(略)右中国、今置介

以上である。

これらの文献によれば、丹後国から五郡を割いて1国としたこと(8世紀初頭)。京よりの行程九日、介あり(『律書残篇』8世紀)と、京より四日、京へ七日、国府は加佐郡に在り(『和名類

聚抄』10世紀)。中国に介を置く(『類聚三代格』9世紀)。というように、諸史によって若干の異同がある。

さて、丹後国府がどこにあったかについては、従来から次の3説がある。

- a, 宮津市府中
- b, 加佐郡大江町河守
- c, 与謝郡岩滝町男山

では、それぞれの説について紹介したい。

- a, 宮津市府中(ふちゅう)説

角田文衛氏<sup>(注7)</sup>の説である。氏は『国分寺の研究』の「丹後国分寺」の項で、加佐郡所在はあまりに東偏しすぎており、国分寺所在地から逆証して「在二与謝郡一」の誤りかも知れないとする。

木下良氏は、宮津市府中には国分寺跡や印鑰の転化と考えられる飯役神社(印鑰社=国司の権威を象徴する国印と府庫の鍵とを祀った社)が存在すること、府中という名称から平安時代末期に加佐郡から移転したと考えられている。

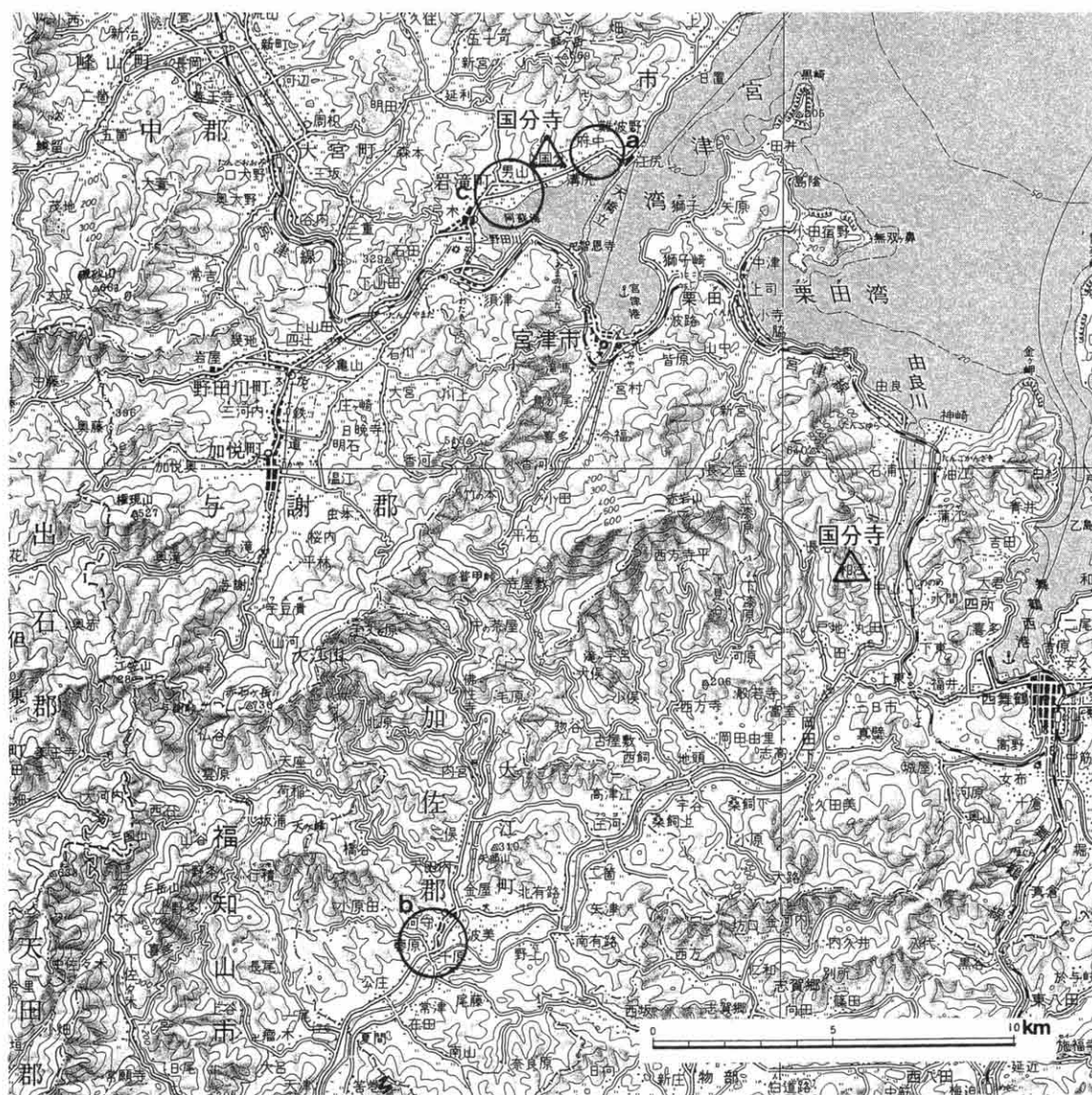
**発掘調査の成果** 当該地の発掘調査は1979年から開始された。中野遺跡がその遺跡名称である。調査は4次まで行われた。

その報告書に「歴史時代の府中」と題して中嶋利雄氏<sup>(注8)</sup>の論考が掲載されている。この中に字中野に所在する小字を紹介している。「飯役」「飯役前」「飯役後」「飯役浜」「丁田」「大門」「大門東切」である。また、字溝尻には「丁田」「東大門」「ドイ」「ドイノ下」「町田」、字小松に「鍵畑」「飯役ノ上」「飯役上」「飯役立」がある。そして、飯役社については本来印鑰(いんやく)社であること、印は国印のことであり、鑰は印櫃のかぎであるが、国衙において押印の印鑰神事が行われたのが年中行事化して、次第に在庁官人の守護神としての印鑰社が国衙付近に祀られるに至ったといわれるとした。

さて、発掘調査成果であるが、調査前の中野遺跡とは、布目瓦など奈良～平安時代の遺物が散布すること、過去に奈良時代軒丸瓦が出土していることから、古代寺院跡と推定され、また、丹後国分寺跡より東に1kmと比較的接近することなどから、国分尼寺の可能性が考えられた。前面には天の橋立があり、その付け根には丹後一の宮である籠神社がある。昭和55年度の第2次調査は、遺跡地の中央部である大乘寺周辺を中心に行われた。ここで礎石列や石敷遺構や平城宮第2次朝堂院に使用された軒平瓦と同系<sup>(注9)</sup>の瓦が出土し、また墨書土器も出土した。

4次にわたる調査を総括した調査者<sup>(注9)</sup>は出土した遺物の中で、土師器は奈良時代中葉まで遡るものが多数あり、須恵器杯Bも奈良時代的なものが多く、瓦では全国の国分寺跡から出土する系統の軒平瓦が出土するなど、ここに奈良時代の遺跡が存在したことは間違いのないとした。が、遺構的にも寺院跡として決定づけることは困難で国分尼寺としての可能性を残しながらも、むしろ国府跡の一部としての可能性を考慮すべきであろうと結論づけた。

なお、平安時代の緑釉陶器や須恵器、土師器、丹後型黒色土器、中国製青磁・白磁も多数出土しており、平安時代以降も有力地であったことは疑いない。



第1図 丹後国府位置図

b, 加佐郡大江町河守(こうもり)説

山田弘通氏の説である。平安時代の短歌、たとえば小式部内侍(和泉式部の娘)の「大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」や、和泉式部の「はななみの里とし聞けば物憂きに君引き渡せ天の橋立」などの歌を考証して駅路を考定し、11世紀初め頃の国府は与謝郡にあったと考えた。『和名抄』に記すように、加佐郡にも国府があったとすれば、『拾芥抄』(13世紀)に記すように両郡国府併立説が最も適当であろうとし、加佐郡の国府は地名から考えて、大江町の河守(こうもり)であろうと推測された。

木下良氏によれば『和名抄』には国府の所在を「加佐郡」と記しているの、その編纂当時には加佐郡に移転したことが考えられるとした。また、同郡にあたる舞鶴市和江には、国分寺を号する平安時代の寺跡も残るので、国府に伴って移転したと考えられるが、その国府跡については明確でないとした。

発掘調査の成果 河守についての発掘調査は、1985年に実施されている。(注12) 部分的なものだが、

この内の1か所で条里と判断されている地割と同方向の溝1条が検出され、出土遺物から9世紀には埋没していたことが確認されている。また、格子叩きの瓦片や、須恵器に墨痕のあるものが3点出土しており、古代の寺院や官衙が存在した可能性が指摘されている。しかし、国府の存在を裏づけるほどのものではない。

1995～1997年にかけて再度調査が実施された。<sup>(注13)</sup>この時は字界部分(小字井田、角田、上横田、関田の畦畔が接する地点)を細長く調査され、平安時代前期(9世紀)の須恵器、土師器が畦畔の中から出土し、その頃に構築されたことが確認できた。この畦畔は、幅1～1.5mほどであり、軟弱な地盤の上に砂利や砂を敷きつめた大畦畔と推定されている。畦畔の補強のためと思われる細長い板が出土したが、その検出途中で「津丸一段」と書かれた木簡が出土した。条里地割については芦田忠司氏の研究がある。<sup>(注14)</sup>

c. 与謝郡岩滝町男山(おとこやま)説

坂口慶治氏の説である。<sup>(注15)</sup>宮津市府中は律令期の国府域を展開するに十分な土地がないとして、隣地の岩滝町男山に方6町または方4町の国府域を想定した。

藤岡謙二郎氏も、集落立地と古代交通路という自然条件を加味しながら考察をすすめ、坂口氏の説を支持した。<sup>(注16)</sup>

さて、<sup>(注17)</sup>積龍雄氏は国府ないしは国分寺の所在地は、概してその国の中央部に位置する場合が多いとし、加佐郡と与謝郡とを比較すると、与謝郡の地が選ばれるであろうとした。

また、男山地区に残存する条里を検討し、東西8町、南北5町(一部4町)域に遺存し、地割の南北線はわずかに西に振っており、東西線とは直交しないと判断した。小字については「三段田」



第2図 岩滝町男山付近条里遺構図(拠. 注17文献)

「四段田」「五反田」「六段田」「八段田」「一町田」「大坪」「惣役」「国住」「町田」「鍵田」「丁後田」等が注目されると指摘した。

なお、太田亮氏<sup>(注18)</sup>は、国府と神社との結びつきを紹介した中で、岩滝町男山の板列八幡社が国府八幡(平安時代になって諸国の国府の地に八幡宮を勧請した、これらの八幡神社をいう)ではないかと想定されている。

**発掘調査の成果** 男山周辺での発掘調査としては、国府推定域の北西隅の千原遺跡での成果がある。<sup>(注19)</sup>3次に及ぶ調査の結果、弥生時代後期から平安時代にかけての遺物が主に出土した。千原遺跡の中央部は後述する私案の国府域に於ける方格地割の北西隅に位置している。その近隣に第2次調査第7トレンチが設定されているが、区画に伴う溝などは検出されていない。なお、第1次調査第2トレンチでは幅40cm程度の溝が磁北に対して西へ7度25分ほど偏した形で検出された。したがって、真北より20分程度西偏した溝である。

また、小片ながら布目のある平瓦、丸瓦が出土したり、内面に漆が付着した須恵器杯身(奈良時代)や、内面にラセン状暗文をもつ都城系の土師器杯などがあることから、この近辺に寺院、あるいは官衙が存在したのではないかとの調査者の見解がある。

### (3)丹後国府の復原

これまでの諸説の説明により、いずれも国府跡と断定する発掘資料は未だないのが現状である。乏しい成果からすれば、宮津市府中では奈良時代中期以降に何らかの施設があったことは確実である。

加佐郡大江町河守については、平安時代初期に現代まで続いた地割が設定されたようである。また、与謝郡岩滝町男山では、国府推定域の中心ではなく、北西隅もしくは更に西方という地点ではあるが、奈良時代に何らかの施設が想定できる。

ここで、もっとも地割が明確な男山で、国府があったとしたらどうかという私案を示したい。積龍雄氏の復原によれば第2図のように東西8町、南北4町の条里(方格地割)が復原できるという。私案は更に1町西に広げることと、南へも1町広げ、結局東西9町、南北5町の方格地割があったと想定したい。そして、国府の主要な建物群としては、東西の中央、「馬カケ場」「甲田」が地形が高く、「町田」の地に東西に長い周辺とは違いやや高い畑があることから、ここに門があったのではないかと推測している。明治時代の陸地測量部の図面では、男山から流れ出た男山川が「甲田」と「町田」との間に東へ屈折し、百mほどで南に転じ現与謝の海病院方面に流れていた。川の屈折は直角であり、いつかは分からないが人為的に付け替えられたと想定できる。男山川を遡ると現中郡(旧丹波郡)大宮町へ出られる。更に遡ると峰山町丹波にいたる。

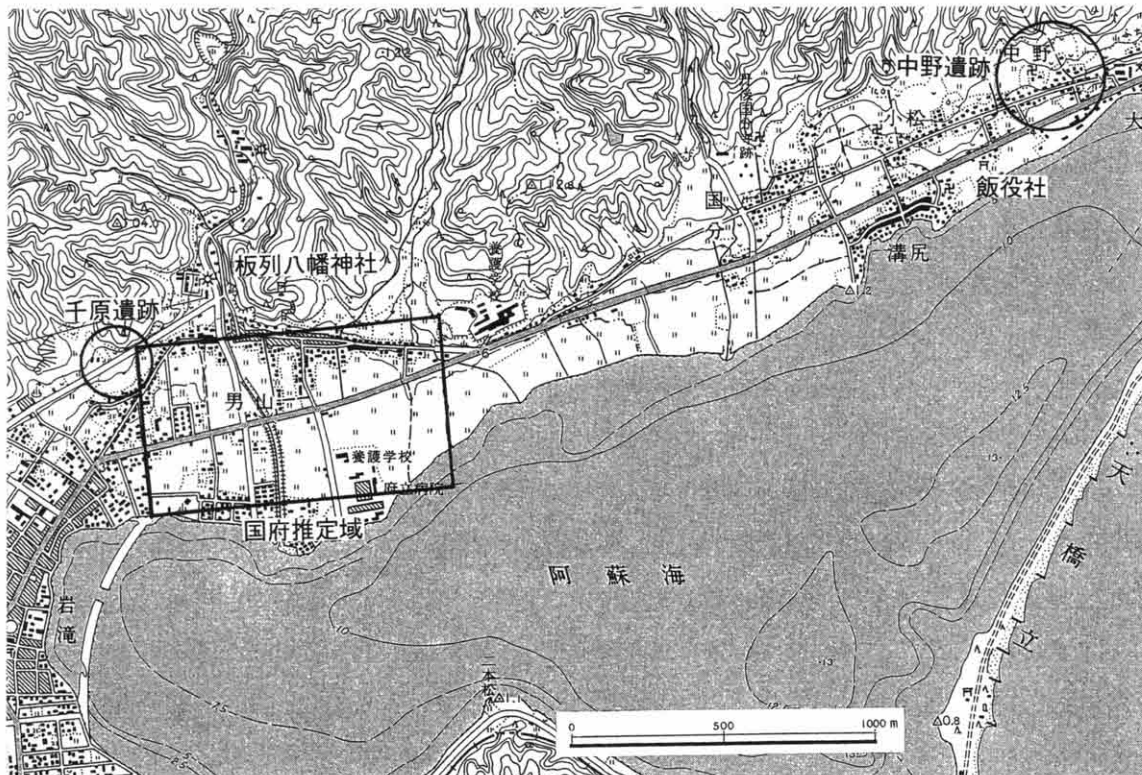
さて、男山に戻ると、平地の中央部を東西方向(やや右上がりではあるが)に府道があるが、これは、昭和になって敷設されたもので、明治時代の道は山沿いを通っていた。先程の国府中心地の北方の山の中腹には板列八幡神社がある。「延喜式」神名帳にみえる与謝郡板列神社を当社に想定する説と、岩滝町小字板列にある板列稻荷神社に想定する説とがあるが、当社が有力らしい。

板列八幡神社については、平安時代の小野僧正仁海(1046年没)が勧請したとの伝承(『与謝郡誌』)がある。なお、15世紀の雪舟による「天橋立図」には、府中から男山にかけての風景が描かれている。右手に丹後一の宮の籠神社、中央に国分寺がある。この一帯には多くの家々が描かれているが、それを越えた男山の地の風景は板列八幡神社の鳥居が描かれているのみで、西方の山寄りに若干の家が描かれているのみである。

発掘調査成果からいえば、府中には奈良時代中期以降、国府があって良いのだが、国分寺が、奈良時代から動いていないとすれば、府中の地には国分尼寺が存在した可能性が高い。未だ遺構は出ていなくとも、遺物は各時代のものが断絶なく出土しており、国分尼寺衰退後も発展したと想定できることから、奈良時代中期以降国府が置かれていたとしても不自然ではない。

『和名抄』が編纂された10世紀に、国府が加佐郡にあったとすれば、河守の地はその候補地となる。しかし、古代の道のルートからすれば山陰道からの支路である丹波路は、福知山から与謝峠を越えて丹後に入るのが一般的であり、福知山から由良川を下る道は険しく、とても河守までは通れなかっただろう。与謝峠を下りた現加悦町滝の地点に古墳時代後期の畿内型横穴式石室(滝岡田古墳)があることは、このルートが古くから開拓されていたことを示している。

そこで、最後に残ったのが、男山の地である。国府推定地の西方で、奈良時代の瓦や畿内系の遺物(暗文のある土師器など)が出土したことは、その当時の寺院あるいは官衙があった証左である。地点から言えば奈良時代初期に国府が設置された際に国府付属寺院(国府寺院)が設置された、その遺跡が千原遺跡であるかも知れない。



第3図 丹後国府(男山説)復原図



丹後一の宮である籠神社(式内社)から約2kmしか離れていないのに、式内社である板列八幡神社があることも、ここにかつて国府があった傍証となるのではないか。

また、私が復原した地割は1区画が111mのものである。これは、かつて書いたように奈良時代初期から中期までは小尺の世界であり、1区画が375尺ならば111mであったと考えられる。このことも、奈良時代初期にこの地に国府が設置された傍証となると考えている。

#### (4)小結

以上、憶測を重ねてきたが、結論としては奈良時代初めに男山に国府が設置されたが、奈良時代中期には府中の地に移ったと考える。そして、河守については古代のルートからすれば国府とするには無理があると考えている。

さて、官道との関係であるが、男山については、現府道にほぼ近い所にかつて、官道があったのではないかと推測する。その根拠は小字「町田」に小高い畑があり、これを門跡にすれば、その南に東西方向の道路が想定できるのではないかというものである。なお、明治時代の陸地測量部の地図に描かれた道は国府推定地の北部を通っているが、これは、北に板列八幡社があり、中世以来武士などの厚い信仰によって使用された道と考えておきたい。

### 3. 官道—道路遺構の分類—

#### (1)道路遺構の研究方法

近年、発掘調査によって古代の道路遺構が検出されたという報告が増加している。これらは、発掘調査で偶然検出されたのではなく、歴史地理学や文献史学の研究成果などから道路が検出されることを想定しておこなわれた発掘調査がほとんどである<sup>(註21)</sup>。これらの調査成果により、従前不明であった道路の規模や構造など、古代国家の交通政策を考える上で重要な資料が考古学から提示されている。

発掘調査前に路線の位置を推定するには、地表に残る痕跡(条里地割など)の分析、国府や国分寺、駅家と考えられる遺跡の位置関係の分析、また絵図に描かれた道路と現在の地形とを照らし合わせ推定する方法、文献の記載から推定する方法などがある。これらの方法から、道路を線として存在する遺構と認識することができるようになる。そして、発掘調査によって得られた成果を積み重ねていくことにより、その路線を確定していき、同時に道路の規模や構造を解明していくこととなる。

しかし、これらの方法で路線の復原がなされている古代の道路のほとんどは七道をはじめとする駅路であり、それ以外の道路に関しては、発掘調査で偶然に検出され初めてその存在が明らかになる例が多い。これらの道路遺構は、事前にその存在を予想することは困難であり、部分的な調査では道路であるということを認識するのは難しい。このことは、駅路推定路線以外での道路遺構の検出例が全国的にみても少ないことが如実に物語っている。また、仮に道路遺構であると認識できたとしても、点でしか確認できなかった道路を線として復原するのはきわめて困難である。このような道路の路線復原には、検出された道路遺構の方向や近接する遺跡、道路の延長線

上にある遺跡の内容(遺跡の性格や出土遺物など)の検討をもとに、路線を推定するという方法をとる場合が多いが、その多くは検出された道路遺構の性格が不明確なため、周辺の遺跡の性格が判明していても遺跡と道路遺構との結びつける根拠が薄弱なものとなっている。

偶発的に検出された道路遺構の属性(たとえば、規模や形態、構造)から道路の性格が推定できれば検出された道路遺構が主要幹線道路なのか、地方道なのか、生活道なのか分類できれば遺跡との結びつけも想定できるのではないだろうか。これらの考えをもとに、発掘調査で検出された古代の道路遺構の規模・形態・構造からの分析を通じて、道路遺構の分類分けを試みその性格を推察する方法を考えることを目的としたい。

今回はその前段階として、発掘調査で検出された遺構を道路と判断する認定条件と道路遺構の規模・形態・構造からみた分類についてひとつの試案を提示し、今後の研究の基礎としたい。

## (2)道路遺構の認定条件と分類

今回、共同研究を行うにあたり、発掘調査で検出された遺構をいかにして道路遺構と認定するのかについて考えた。そして、基礎的な認定条件についていくつか整理してみた。

さらに、道路遺構の立地や構造(工法)などから、道路遺構を分類するための条件も挙げてみた。

### 1)認定条件 遺構を道路跡として認定するに必要な条件としていくつか考えてみた。

第1に、帯状に連続性がある特定空間(路面)を形成すること。第2として、基本的に路面には、同時期の遺構が存在しないこと(ただし、道路に伴う施設や、暗渠など関連する遺構は例外とする)。この2項目は、道路遺構と判断するための基本的なものである。たとえば、同時期の溝が2条あり、その溝が一定幅を保ち同一方向に連続して検出されている状況などは道路遺構の認定ができるだろう。

さらに、上記の条件を補うための条件として、道路の検出状況や工法的な面から以下の3項目の補足条件を考えてみた。

- ①路面に舗装(アスファルトなど)や硬化面(版築など)が認められる。
- ②切り通し・土塁・版築などの工法でつくられている。
- ③側溝・暗渠・橋梁などが伴う。
- ④轍跡などの通行を示す痕跡が確認できる。

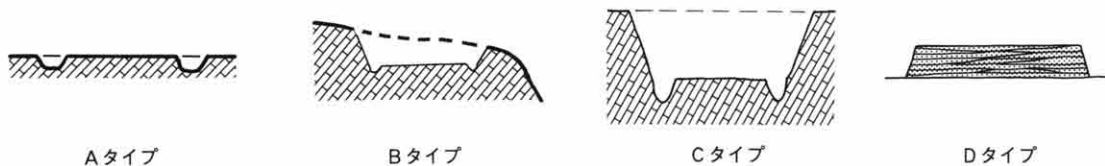
発掘調査によって、道路状に検出された遺構の立地・構造などをこれらの条件に照らし合わせれば、道路遺構の認定ができるであろう。しかし、調査範囲が狭い場合や道路側溝が1条しか検出できなかった場合などは、その調査区だけでの認定は困難となろう。

### 2)道路遺構の分類

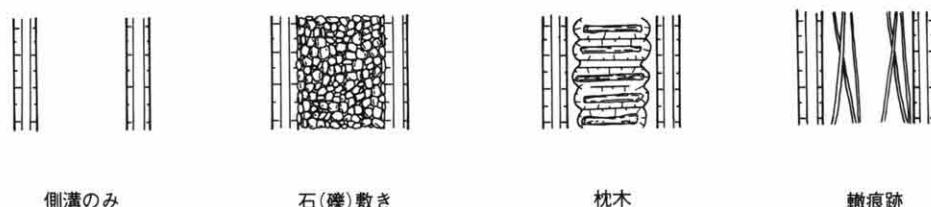
次に、道路遺構と認定した遺構を地形的な立地や道路構造の違いから、いくつかのタイプに分類を行ってみた(第4図)。

Aタイプ：平地の安定した地盤に2条の溝(側溝)が掘られたもの。(例：大阪府郡家今里遺跡<sup>(注22)</sup>=山陽道)

道路遺構のタイプ



路面の形態



第4図 道路遺構の分類と路面形態模式図

Bタイプ：ゆるやかな丘陵をカットし、路面はゆるやかなスロープをつくるもの。(例：宮崎県並木添遺跡<sup>(注23)</sup>)

Cタイプ：急斜面をもつ丘陵に対しては、切り通しを用いるもの。(例：佐賀県吉野ヶ里遺跡<sup>(注24)</sup>)

Dタイプ：低湿地などで、盛り土をおこない堤状の土橋(道路面)を構築しているもの。(例：京都府下植野南遺跡<sup>(注25)</sup>＝久我畷)

ここでは道路遺構のタイプを立地や構造面から大まかに4タイプに分類した。基本的にはこの分類に分けられるだろう。さらに路面の工法を細かくみれば、石敷きを施すものや砂などを用いて人為的な舗装を施すもの(例：福岡県那珂久平遺跡<sup>(注26)</sup>)、板状の凸凹面(枕木の痕跡か)をもつもの(例：福岡県薬師堂東遺跡<sup>(注27)</sup>)など多様である。また、側溝を持つものの中には、側溝が排水の役目を果たしていたものもある。これらを細分すれば、道路遺構の形態は多種多様になりすぎる。ここでは立地・構造面から分類したA～Dまでの4タイプの分類を基本としたい。今後この分類を基本として、発掘調査で検出された個々の道路遺構を分類していきたい。

(3)官道と官衙の関係について

古代の道路の研究は、これまでの歴史地理学的研究や考古学的な調査によって、直線的な道路であったことが確認されている。基本的には、目的地までの最短距離を通っている。しかし、丘陵や河川などで地形的な制約を受け、官衙施設や集落などを迂回している例や集落内を通る例がみられる。この場合、官衙施設や集落との成立の時期差が考えられる。官道と官衙施設との位置関係として、ここでは基本的にものとして、2つの場合を挙げてみた。

- ①官道に隣接したところに官衙施設が設けられている。
- ②官道沿いではなく離れたところに官衙施設があり、支道(枝道)で結ばれている。

官衙と官道の位置関係には、さまざまな理由が考えられる。②の場合には、地形的制約があるもの、防衛を意図したものなどの理由が考えられるのではないか。

また、重要なこととして、官衙と官道のそれぞれの成立・整備時期を認識しておくことが必要であろう。

官道と官衙施設の関係は、今回の共同研究のテーマのひとつであるが、道路遺構の分類をすることによって道路の性格が判明し、そのことによって、周辺の遺跡や官衙施設との関連についての検討資料のひとつとなるのではないだろうか。

#### (4) 今後の課題

今回は道路遺構の認定の条件と立地・構造面からみた道路遺構の分類の基本的な提示にとどまった。今回の分類は道路の立地面と構造面からのアプローチであった。今後、幅員からの道路の分類が必要であろう。幅員から道路遺構を分類することによって、現在の性格不明の道路遺構が主要幹線道路・地方道・生活道路のどれにあたるのか判断するものになるだろう。

今回は一例を挙げたのみであったが、今後は調査例を精査して具体的に検討して行きたい。

また、提示できなかつた幅員から道路遺構を分類と検出された道路遺構のタイプ分類作業については、次の機会に報告することとしたい。

#### 4. おわりに

本稿は2. 官衙を伊野が、3. 官道を村田が執筆した。私達の古代の官衙と官道に関する研究は未だ緒についたばかりである。今後も徐々にではあるが問題を解決していきたいので、大方の叱正を望むものである。

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第2係長)

(むらた・かずひろ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 「古代の国府の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 国立歴史民俗博物館 1986

「古代の国府の研究」(続)『国立歴史民俗博物館研究報告』第20集 国立歴史民俗博物館 1989

注2 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房 1994

注3 山中敏史・佐藤興治『古代日本を発掘する5 古代の役所』岩波書店 1985

注4 門脇禎二「丹後王国論への序章」(『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会) 1983

注5 平良泰久「丹波の分割」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注6 注2に同じ

注7 角田文衛『国分寺の研究』下 1938

注8 中嶋利雄「歴史時代の府中」その(3)まで『中野遺跡第1次発掘調査概要』～『中野遺跡第4次発掘調査概要』宮津市教育委員会 1980～1983

注9 中嶋陽太郎「IV 小結」(『中野遺跡第4次発掘調査概要』宮津市教育委員会) 1983

注10 山田弘通「百人一首の歌と丹後の国府」(『日本歴史』245 吉川弘文館) 1968

注11 木下良「古辞書類に対応する諸国国府の所在と移転」『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 国立歴史民俗博物館 1986

注12 三好博喜「河守遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研

- 究センター) 1986
- 注13 赤池学博「河守遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第2集 大江町教育委員会) 1996  
松本学博「河守遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第3集 大江町教育委員会) 1997  
松本学博「河守遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第5集 大江町教育委員会) 1998
- 注14 芦田忠司「大江町の条里制遺構」(『大江町誌』通史編 上巻) 1983
- 注15 坂口慶治「丹後国府址一考」(『地理学研究報告』16 京都教育大学地理学会) 1968
- 注16 藤岡謙二郎「丹後と但馬の国府」(『国府』日本歴史叢書25 吉川弘文館) 1969
- 注17 釋龍雄「丹後」(『新修国分寺の研究』第四巻 山陰道と山陽道 吉川弘文館) 1991
- 注18 太田亮「国府・国分寺関係の神社」(『新修国分寺の研究』第六巻 総括 吉川弘文館) 1996
- 注19 羽瀧賢良ほか「千原遺跡第1次発掘調査概要」～「千原遺跡第3次発掘調査概要」(『岩滝町文化財調査報告』第7集、第8集、第11集 岩滝町教育委員会 1985 1986 1988)
- 注20 伊野近富「方格地割制と条里制」(『京都考古』第65号 京都考古刊行会) 1992
- 注21 この方法で発掘調査が行われているところは、関東地方(栃木県・群馬県・埼玉県・東京)の東山道、千葉県の東海道、京都府・大阪府の山陽道、福岡県・佐賀県の西海道、富山県の北陸道などである。
- 注22 宮崎康雄「山陽道跡の調査」(『高槻市文化財年報』平成3年度 高槻市教育委員会) 1993、鐘ヶ江一朗「27-3. 郡家今城遺跡の調査(4)」(『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』12 高槻市教育委員会) 1988、橋本久和「28. 郡家今城遺跡の調査(5)」(『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』12 高槻市教育委員会) 1988、橋本久和「35. 郡家今城遺跡の調査(9)」(『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』13 高槻市教育委員会) 1989、橋本久和「37. 郡家今城遺跡の調査(11)」(『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』13 高槻市教育委員会) 1989、宮崎康雄「郡家今城遺跡(89-2)の調査」(『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』14 高槻市教育委員会) 1990
- 注23 1992年8月24日付、西日本新聞夕刊
- 注24 『吉野ヶ里』佐賀県教育委員会 1992
- 注25 戸原和人「長岡京跡左京第35次(7ANMSB)地区調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1985
- 注26 『那珂久平遺跡』福岡市教育委員会 1986
- 注27 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13 福岡県教育委員会 1988

参考文献(伊野論考分)

磯野浩光「丹後国の国名について」(『浪江庸二先生・林和廣先生追悼太邇波考古論集』両丹考古学研究会) 1997、磯野浩光「丹後の古道について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996、奥谷高史『丹波の古道』綜芸社 1980

参考文献(村田論考分)

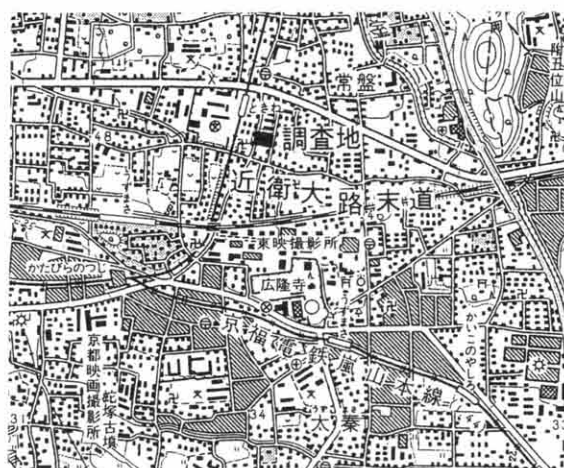
「特集古代の道と考古学」(『季刊考古学』第46号) 1994、山村信榮「大宰府周辺の古代道路」(『九州考古学』第68号) 1993、山村信榮「古代道路の諸相」(『古代文化』47-4) 1995、近江俊秀「道路遺構の構造」(『古代文化』47-4) 1995、近江俊秀「古代道路遺構の形態からみたその性格」(『古代交通研究』第7号) 1997、富永樹之「奈良平安時代の幹道、支道、生活道」(『青山考古』第10号) 1992、藤岡謙二郎『古代日本の交通路Ⅰ・Ⅱ』大明堂 1978、足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985、高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂 1995

ときわなかのちょう  
1. 常盤仲之町遺跡

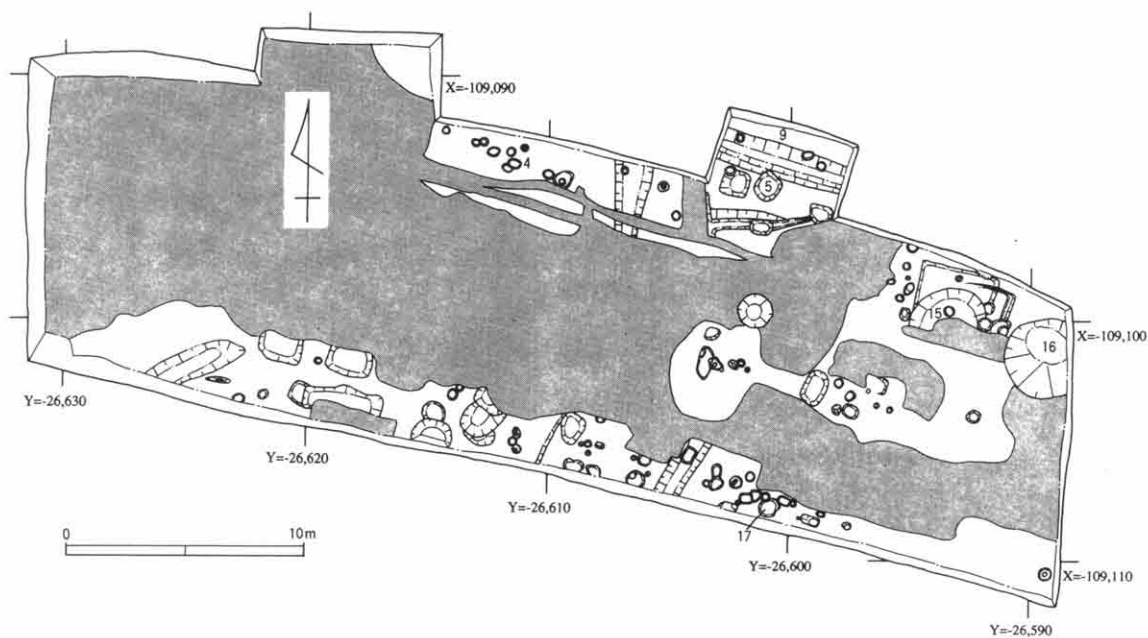
所在地 京都市右京区常盤窪町1-4～8  
調査期間 平成13年5月7日～平成13年6月29日  
調査面積 300m<sup>2</sup>(調査対象面積600m<sup>2</sup>)

はじめに 常盤仲之町遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部が施工する府営住宅常盤団地の建替に伴う事前調査である。同遺跡は、古墳時代後期から江戸時代にかけての集落跡であり、関連する遺構、遺物の検出が予想された。なお、発掘調査は、建設予定地である600m<sup>2</sup>についての残土処分を実施するとともに、攪乱下に遺構面が残存していることが判明したため、攪乱土を人力で除去しながら調査をすすめた。

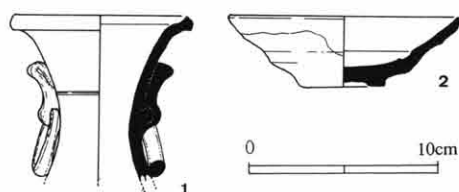
調査概要 調査地内には、江戸時代中期以降



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 遺構配置図(網部は攪乱)



第3図 出土遺物実測図  
(1：土坑17、2：柱穴4)

の遺構と同時期の遺物包含層が堆積しており、人力で除去した。また、それらの堆積層下には淡茶褐色土層が堆積しており、今回の発掘調査で確認した遺構は、すべて当該層上で検出した。なお、検出した遺構には、土坑、溝、方形区画溝、柱穴などがあるが、攪乱を受けた範囲が多いため、建物の規模や配置などは明らか

にし得なかった。

溝9は、幅1.2m、深さ0.5mを測り、溝の主軸は座標北から西方向に約70°振る。また、溝9の南隣接地には、人頭大の石を底部に据えた柱穴を検出しており、屋敷内を区画する溝や塀の存在を想定することができる。溝内から室町時代に比定できる瓦質土器の羽釜が複数個体出土している。柱穴4では、完形の状態を保った唐津焼の皿が一点出土している。建物を建て替える際に意図的に埋納されたと考えられる。江戸時代初頭に比定できる。土坑15は、南半部が攪乱により消失しているが、直径約3mを測る円形土坑である。土坑内からは土師器や陶磁器類が出土しており、柱穴4と同じく江戸時代初頭に比定できる。土坑17は、直径0.7mの不整形な土坑で、土坑内から古瀬戸の花瓶が出土している。出土した花瓶は、完形品ではないが、出土状況から意図的な埋納を想定することも可能である。おおむね室町時代に比定できる。

なお、室町時代から江戸時代前期の遺構および遺物包含層から平安時代の緑釉陶器や平瓦が出土している。明確な遺構は確認し得なかったが、平安時代にも何らかの土地利用が行われたことを示唆する遺物として捉えておきたい。

一方、出土遺物には、室町時代から江戸時代にかけての陶磁器類や土師器などがある。第3図1は、土坑17から出土した室町時代の古瀬戸の花瓶である。口径9.2cmを測る。2は、柱穴4から出土した江戸時代初頭の唐津焼の皿である。口径12.2cmを測る。これらは検出した遺構の時期を決する上での基礎資料であり、特に、古瀬戸の花瓶は、希有な出土例である。

まとめ 今回の発掘調査では、室町時代と江戸時代前期の屋敷跡を確認することができた。特に、屋敷内を区画する目的で穿たれた溝9やその南方に所在する柱列の主軸は、先に述べたように座標北から西方向に約70°振っていることが確認できた。溝9以外の溝の主軸も、僅かな違いはあるが、おおむね溝9の主軸と一致する傾向にあり、これらの主軸は、調査地周辺における現行の地割の方向と一致している。

調査地の南方約50mには、平安時代に成立したと考えられる近衛大路末道が東西方向に走っており、近世においても市街域と嵯峨一带を結ぶ主要な道路であったと考えられる。調査地南方の近衛大路末道と今回確認した溝9の主軸が一致していることから、まず、地形に沿って近衛大路末道が敷設され、それを中心に屋敷などが徐々に建てられたと考えられる。

今回の発掘調査では、近衛大路末道が平安時代まで遡り得る根拠は得られなかったが、少なくとも室町時代までは遡り得る可能性を指摘できた。今後、周辺の歴史的環境を考察する上で重要な調査成果となった。

(小池 寛)

## ながおきょう ひがしだい 2. 長岡京跡右京第697次・東代遺跡

所在地 長岡京市天神4丁目  
調査期間 平成13年4月17日～平成13年6月14日  
調査面積 約300m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は雇用・能力開発機構の職員住宅の新築工事に伴う発掘調査である。調査地は長岡京市立長岡中学校の西隣であり、長岡京跡の条坊復原によると、右京五条三坊十六町(五条三坊十四町)にあたる。また、下層では中学校内の調査で新たに確認された、縄文時代から弥生時代にかけての東代遺跡の範囲に含まれている。

調査の概要 調査地は、西山山地の高位段丘から続く低位段丘の端部にあたる場所に位置している。調査区は建物計画部分を対象に、北側に向かって、逆「L」字形に設定した。西側の張り出し部分では、表土から約0.3m掘削した表土直下で段丘面を確認した。調査区東半部で確認した遺構面は上層と下層の2面ある。上層遺構は現代の盛土層を除去し、耕作土および床土を外した面で確認した。遺構検出面は、緑灰色の砂層で、検出遺構は耕作に伴う溝群である。溝群は基本的に南北方向を示し、北側と南側の溝に分かれ、少なくとも畑2面を検出したものと思われる。

また、下層遺構は更に0.5mほど重機で掘削し、旧表土と思われる暗茶灰色粘質土の下層で、段丘礫の地山につづく安定面を確認した。調査区の南東側は整地面となっており、本来は谷地形となっていたようである。下層遺構には掘立柱建物跡や井戸、土坑、溝などがある。

掘立柱建物跡 S B 69708は、南北2間、東西1間以上の規模をもつもので、柱穴心々の距離は東西・南北とも約2.4mを測る。建物は座標北からN12°Wの振れを持っている。井戸 S E 69701は、縦板組横棧留めの井戸である。掘形の規模は東西0.9m、南北1.2m、深さ0.45mを測る。井戸枠の規模は内法で東西0.58m、南北0.71m、深さ0.31mを測る。井戸枠はN10°Wの方向に振れている。出土遺物には土師器の細片があるが、時期は奈良・平安時代と考えられる。溝 S D 69709は、長さ9.8m、幅0.35m、深さ5cmの溝である。区画溝と考えられる。溝 S D 69710は、溝 S D 69709の東肩に接するように、ほぼ平行し、長さ7m、幅4cm、深さ約5cmを測る。断面形が方形をなすこの細い溝に板をはめ込んでいたものと思われる。宅地を区画する板塀の痕跡と考える。

出土遺物 包含層出土のもので、須恵器蓋、杯、製塩



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



土器片などがある。蓋にはつまみをもつものと、もたないものがあり、杯には高台の付くものと付かないものがある。そのほか、縄文時代に属すると思われるサヌカイト製の削器や弥生時代後

期と思われる甕などが出土している。

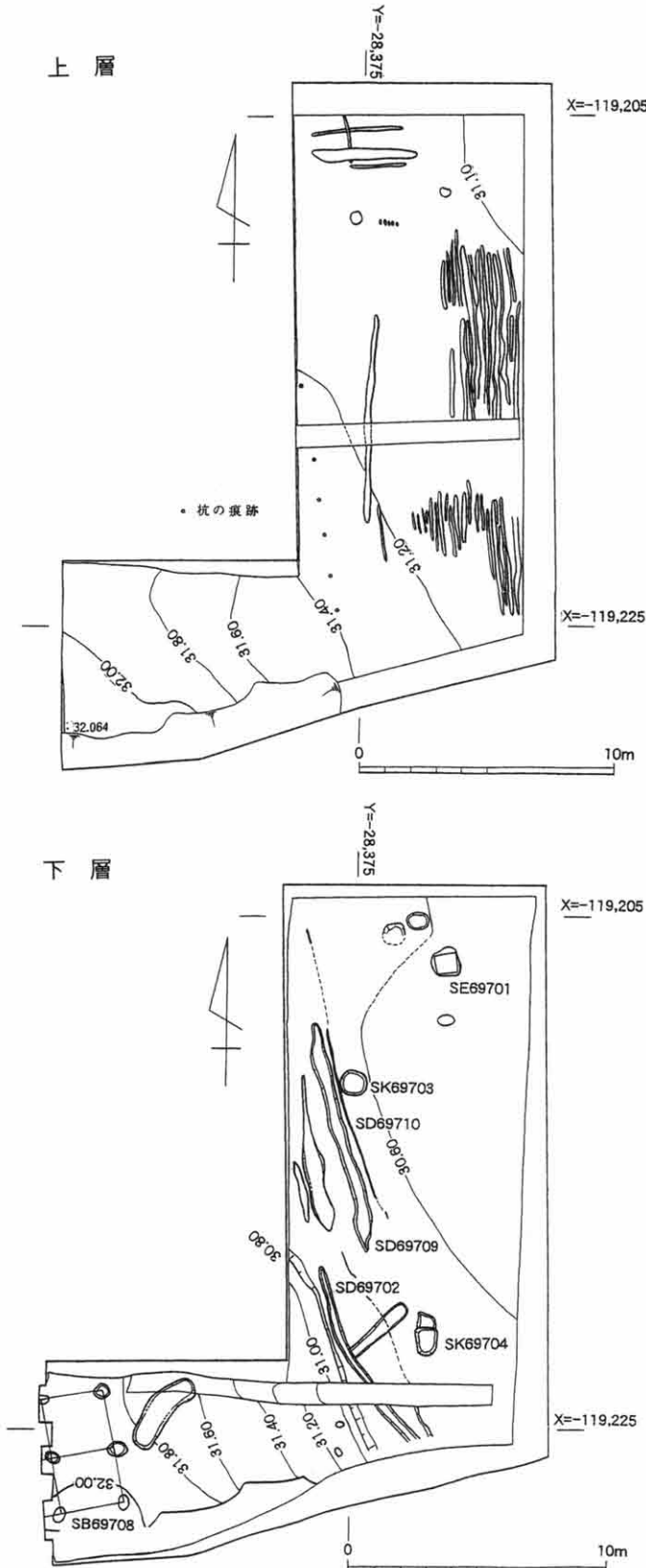
まとめ 今回は上層で近世と思われる畑の耕作に伴う溝々を、下層で奈良時代から平安時代と思われる遺構を確認したが遺構密度は希薄であった。下層遺構の検出面上面で奈良時代から平安時代にかけての遺物包含層を確認し、下層遺構に伴う整地層中では弥生時代後期と思われる土器が出土しているが、下層の断ち割りでは遺物が確認できなかったため、整地の時期も奈良時代から平安時代頃の造成と考えられ、谷の埋没年代はそれ以前に遡る可能性が考えられる。

下層遺構の方位は、北から西へ約15°から20°振れており、長岡京期の遺構がほぼ真北を向くことからそれ以前の遺構と考えられる。包含層出土の土器の型式と土器に書かれた墨書の書体が奈良時代の様相を示していることを根拠として、下層で確認された遺構は奈良時代に遡る可能性が考えられる。また、長岡京期に採用された条坊地割がそれ以降に改変された可能性も考えられるが、正南北方位の地割が卓越する周辺の現地形を見る限り、その可能性は低いものと思われる。

包含層出土の縄文時代および弥生時代の遺物は東代遺跡に関する資料で、調査地西側の段丘面に同時代の遺構が存在することを示唆している。

(柴 暁彦)

注 墨書については、向日市教育委員会清水みき氏のご教示による。墨書の文字は「大家」である。



第2図 検出遺構平面図

### いちださいとうほう 3. 市田齊当坊遺跡第4次(A地区)

所在地 久世郡久御山町大字市田小字齊当坊・新珠城地内  
 調査期間 平成13年4月17日～6月28日  
 調査面積 約1,100m<sup>2</sup>

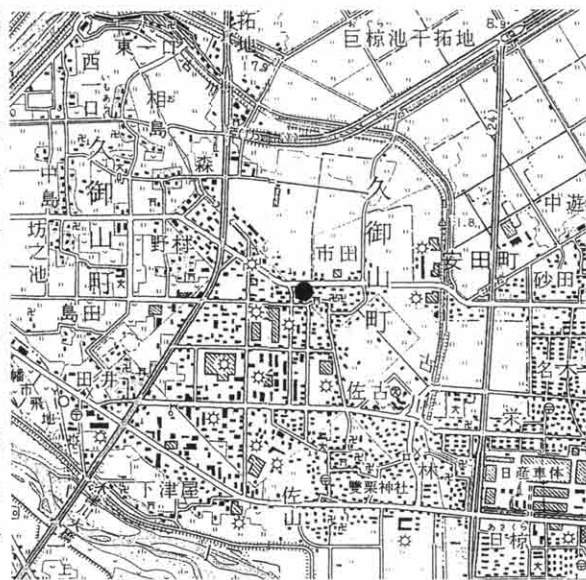
はじめに 今回の市田齊当坊遺跡の調査は、国土交通省と日本道路公団が計画する第二京阪道路および国道1号京都南道路建設に伴う事前の発掘調査で、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。

市田齊当坊遺跡は、宇治川・木津川・桂川の3河川がかつて流入していた旧巨椋池の南岸に位置している。今回の市田齊当坊遺跡の調査区は、これまでの一連の調査地の北端(A地区)にあたり、現在の地表下約2.2mで素掘溝、地表下約2.7mで、弥生時代の竪穴式住居跡や方形周溝墓などを検出した。

**調査概要** 調査区の北端で、東西方向の大型の素掘溝(S D51・52)を検出した。検出面では幅1.5～3.0m、深さ1mほどの断面規模をもつ。この大型の素掘溝は、ともに調査区中央付近で北側に折れ曲がる。出土遺物は多くはなかったが、溝底近くから瓦器碗・青磁の破片とともに五輪塔の空風輪が出土した。室町時代のもつとみられる。この大型素掘溝のL字屈曲部に接続する南北方向の素掘溝群を検出した。この素掘溝は繰り返し掘削されたもので、以前調査した南側のB地区の調査区に続く坪境道の側溝と考えられる。これらの南北方向の素掘溝は、久世郡条里の地割に則っており、条里型地割の坪境の明示と排水のために掘削されたものとみられる。

弥生時代の遺構としては、竪穴式住居跡3基、貯蔵穴1基、方形周溝墓8基以上、長楕円形あるいは隅丸長方形の土坑10基のほか、多量の土器が廃棄されていた大型円形土坑や、その他の小さな楕円形土坑などを検出した。竪穴式住居跡は、一部方形周溝墓の周溝掘削の際に破壊されており、周溝内に多量の遺物が包含されていた。

竪穴式住居跡のひとつ(S H74)に、南北5.6m、東西4.5mを測る隅丸方形の平面形のものがある。その北東部分では、炭化物や焼土などとともに4本の炭化木が並んで出土した。壁を



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 調査地全景(西から)

T68と方形周溝墓S T73がある(写真参照)。方形周溝墓S T68は、調査区中央東側、南北の周溝間15mを測る最も規模の大きいものである。墳丘部分は、周溝から高さ1.4mほど遺存していた。周溝南西辺では、多量の土器・石器が出土しており、その中には銅剣形石剣もみられた。周溝最下層の出土土器は中期後葉のものである。方形周溝墓S T73は、調査区中央北側で検出した。方形周溝墓S T68に北接し、南北・東西とも周溝間ほぼ10mの正方形に近い平面形をもつ。中央を中世南北素掘溝群によって破壊されているため、主体部を検出できなかったが、南西辺周溝から中期前葉の広口壺が出土した。

長楕円形あるいは隅丸長方形の土坑の中には、掘形が舟底状になるもの(S K75)がある。検出面での全長は2.5m、幅1m、深さ0.5mの規模である。木棺の痕跡は検出できなかったが、墓壙と考えてもおかしくはない。長楕円形あるいは隅丸長方形の土坑のなかには、その埋土下層に哺乳類骨細片、上層に多量の土器片を包含するものもあり、中期前葉以前のものともみられる。

まとめ 大型素掘溝は、久世郡条里型地割の坪境に位置しており、当該調査区の北西の坪の東南隅を区画するように掘削されていた。調査区北西には、耕地とは別に環溝をめぐる屋敷あるいは孤立村落が存在していた可能性を指摘できる。

今回の発掘調査でも多量の弥生土器のほかに、玉作り素材として利用された碧玉原石や管玉未製品、管玉を加工・穿孔する際に使用した石鋸や砥石、石針など玉作りに関連した遺物が多数出土した。この他、銅剣形石剣や磨製石剣の刃部破片を再利用した扁平片刃石斧などの出土も注目される。弥生時代中期前半には、碧玉を素材とした玉作りを行う集落が存在しただけでなく、中期でも比較的早い段階にすでに方形周溝墓が築造され始め、中期後葉に至るまで、その周溝が再掘削されていたことが判明した。長楕円形あるいは隅丸長方形の土坑は、東西方向に並んで検出されており、中期前半の集落に伴う墓壙群の可能性がある。

(野島 永・野々口(高野)陽子)

## 長岡京跡調査だより・78

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成13年5月23日・6月27日・7月25日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内6件、左京域3件、右京域12件であった。京域外の3件を併せると、合計24件となる。

調査地一覧表(2001年7月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第404次	7ANEAC-6	向日市冠鷄井町荒内95-1,9	(財)向日市埋文	4/24~6/7
2	宮内第405次	7ANCMM-5	向日市向日町南山29	(財)向日市埋文	6/12~6/25
3	宮内第406次	7ANBHN-3	向日市寺戸町東野辺30	(財)向日市埋文	6/26~7/9
4	宮内第407次	7ANBNN-3	向日市寺戸町中野3-5	(財)向日市埋文	7/9~7/17
5	左京第462次	7ANEUK-3	向日市冠鷄井町馬司18	(財)向日市埋文	3/9~6/8
6	左京第463次	7ANDND-2	向日市森本町野田14-2	(財)向日市埋文	5/11~6/25
7	左京第464次	7ANDND-3	向日市森本町野田14-2	(財)向日市埋文	6/26~7/17
8	南条遺跡第3次	7ANJANJ-3	向日市寺戸町南条43-1他	(財)向日市埋文	6/20~8/31
9	中海道遺跡 第56次調査	3NNANK-56	向日市物集女町御所海道56	(財)向日市埋文	6/11~6/27
10	立会第01026次	7NNFMK-56	向日市上植野町南開58	(財)向日市埋文	6/1~4/5
11	右京第696次	7ANMWY-7	長岡京市神足1丁目601-10	(財)長岡京市埋文	4/9~6/4
12	右京第699次	7ANKNZ-12	長岡京市天神1丁目4-7	(財)長岡京市埋文	4/20~5/21
13	右京第700次	7ANQUT-2	長岡京市久員2丁目13-14他	(財)長岡京市埋文	5/14~5/23
14	右京第701次	7ANIKU-5	長岡京市今里5丁目31	(財)長岡京市埋文	5/21~8/17
15	右京第702次	7ANQNC-2	長岡京市勝竜寺西町一	(財)長岡京市埋文	5/29~6/7
16	右京第703次	7ANIHR-6	長岡京市今里3丁目14	(財)長岡京市埋文	6/4~7/6
17	右京第706次	7ANMSC-2	長岡京市神足3丁目804他	(財)長岡京市埋文	7/2~8/27
18	右京第707次	7ANISY-3	長岡京市今里2丁目115他	(財)長岡京市埋文	7/9~8/22
19	右京第708次	7ANNNT-2	長岡京市友岡西畑5-1他	(財)長岡京市埋文	7/2~7/13
20	右京第709次	7ANJKD-3	長岡京市長法寺河原谷21	(財)長岡京市埋文	7/10~7/23
21	大山崎町第43次 遺跡確認調査	7YYMSNM-11	大山崎町円明寺夏目23-1 永福寺12-2	大山崎町教委	5/14~5/25
22	下植野南遺跡		大山崎町下植野門田地区、 土辺、五条本地区	(財)京都府埋文	4/9~12/下旬
23	右京第697次	7ANPHI-3	長岡京市天神4丁目87・88番地	(財)京都府埋文	4/17~6/14
24	右京第704次	7ANGSK-1	長岡京市井ノ内白海道1-2他	(財)京都府埋文	7/17~8/下旬

### 長岡京跡発掘調査抄報

平成13年度第1四半期は、小規模な調査が多いながらも、長岡京跡の北限についての貴重な成果が得られた。また、近世勝龍寺城跡の調査においても注目される発見があった。

**左京463・464次調査** 調査地は北京極大路、北一条二坊四町に推定される。検出遺構は推定北京極大路の両側溝(溝心々間9.2m・31尺)、四町内ではほぼ同規模の庇を持つ掘立柱建物跡2棟分がある。

出土遺物は長岡京期のものとして土師器、須恵器、軒丸瓦、平瓦がある。墨書土器は日常の食器である須恵器杯底部外面に「伊勢□」と墨書され、人物名と思われる。軒丸瓦は単弁蓮華文で中房部分が盛り上がる特徴を備え、他に例を見ない型式である。

調査の結果から、検出された道路遺構は長岡京の北限を画する北京極大路と想定されるが、道路幅が約9mと小規模であることから(本来の大路幅は24~36m(80~120尺)である)、北京極大路には比定できないとする意見がある。これに代わる北京極大路の候補としては、その規模、位置から2町南にある「北一条大路」があげられる。しかし、この大路と宮内朱雀大路との交差点(北端)に位置するところに門などの施設が検出されていない。したがって、京域の北限の確定は出来ない状況にある。宮域を越えた「北苑」や仮内裏としての「東院」などの宅地利用が盛んに行われていた事実が次第に明らかになるなかで、長岡京北辺の様相がさらに解明されることが期待される。

**右京696次調査** 調査地は六条一坊七町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡に推定される、弥生時代から近世に至る複合遺跡である。検出遺構は弥生時代の方形周溝墓5基、長岡京期の六条条間小路北側溝と溝に併行する柵列、近世勝龍寺城に係わる柵列などである。このほか平安~鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、溝などがある。

長岡京期については、前述のほかには遺構、遺物ともに希薄であり、この傾向は調査地周辺一帯でみられる。

方形周溝墓群は一辺10m前後で、神足遺跡内では比較的大型のものに属する。出土遺物は極めて少ないが、櫛描直線文の確認できる壺の破片などがある。

近世勝龍寺城の柵列は「コ」の字状を呈し、東西方向の4条(2条が平行で一組)、南北方向の2条(一組)が検出された。柱間寸法は1.6~1.8mとばらつきがあるが、柱穴の規模は直径0.4~0.7m、深さ0.4~0.7mを測り、堅固な柵列である。2条の間隔は1.6~1.7m、「コ」の字状の内側の規模は約20mで広い空間が確保されている。また、内側の柱穴は外側のものより一回り大きく、深いことから、この建造物は2条のピット列を側柱とし、上屋(屋根)を持ち、内側の空間を広場として利用した施設であると推察される。今回の調査地は本丸北側に位置し、永井氏の「勝龍寺城改築計画図」(長岡天満宮宮司中小路宗康氏所蔵)には全く書き込みがないことから、日常的には空閑地であり、検出された遺構は非日常的な行事、祭り、或いは軍事目的に利用された施設と思われる。

(竹井治雄)

## センターの動向(01.5～7)

## 1. できごと

5. 7 常盤仲之町遺跡(京都市)発掘調査開始
- 9 稲葉遺跡(京田辺市)発掘調査開始
- 14 東禅寺古墳群(宮津市)発掘調査開始
- 18 職員研修(於：当センター)講師：石尾政信専門調査員「寺院遺跡調査課程」
- 19～20 日本考古学協会総会(於：東京都)戸原和人主任調査員、村田和弘調査員出席
- 21 三山木遺跡(京田辺市)発掘調査開始
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
6. 1 木津城山遺跡(木津町)発掘調査開始
- 5 桑原口遺跡(宮津市)発掘調査開始
- 7～8 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：徳島市)中谷雅治常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人総務課主幹出席
- 8 市町村史跡・埋蔵文化財保護行政担当者会議(於：府庁)久保哲正調査第1課主幹、水谷壽克調査第2課課長補佐出席
- 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 13 長岡京跡・東代遺跡(長岡京市)関係者説明会
- 椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査開始
- 14 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：長岡京市埋蔵文化財センター)小山雅人調査第1課長、水谷壽克調査第2課課長補佐、森島康雄調査員出席
- 長岡京跡・東代遺跡、発掘調査終了(4.17～)
- 15 職員研修(於：当センター)講師：福嶋利範事務局次長「発掘調査現場の運営について」
- 19 府庁開庁記念式典(於：府民ホール)中谷雅治常務理事・事務局長出席
- 監事事務監査
- 和田晴吾立命館大学教授、女谷・荒坂横穴群現地指導
- 21 監事監査
- 都出比呂志理事、女谷・荒坂横穴群現地視察
- 23 第90回埋蔵文化財セミナー(於：京都府立丹後郷土資料館)
- 25 第62回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)
- 常盤仲之町遺跡関係者説明会、発掘調査終了(5.7～)
- 27 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 28 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピューター等研究委員会(於：名古屋市)小山雅人調査第1課長、森島康雄調査員出席
- 市田齊当坊遺跡・佐山遺跡現地説

- 明会、市田斉当坊遺跡発掘調査終了  
(4. 17~)
7. 3 女谷横穴C支群(八幡市)関係者説明会
- 6 杉北遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 12 井手寺跡・栢ノ木遺跡(井手町)発掘調査開始
- 16 職員研修(於：当センター)奈良国立文化財発掘技術者等研修報告、講師：村田和弘調査員「報告書作成課程」、野々口陽子調査員「遺跡写真課程」
- 17 長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 19 中谷雅治常務理事・事務局長、東禅寺古墳群現地視察
- 24 中谷雅治常務理事・事務局長、井手寺跡・佐山遺跡現地視察
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 30 東禅寺古墳群現地説明会

## 2. 普及啓発活動

6. 23 第91回埋蔵文化財セミナー(於：京都府立丹後郷土資料館)『弥生の墓 北から南から』：藤井整調査員「下植野南遺跡の方形周溝墓について」、加藤晴彦加悦町教育委員会主事「日吉ヶ丘遺跡の発掘調査について」、石崎善久調査員「峰山町 赤坂今井墳丘墓の発掘調査」

## 3. 人事異動

6. 30 平木紀子主事退職



東禅寺古墳群 現地説明会

受贈図書一覧(01.5～7)

(財)北海道埋蔵文化財センター

調査年報13、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第152集 キウス4遺跡(7)、同第153集 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡、同第155集 ポンシラリカ1遺跡・黒岩3遺跡、同第157集 キウス4遺跡(8)、同第158集 虎杖浜2遺跡、同第159集 ユカンボシC15遺跡(4)、同第160集 対雁2遺跡(2)、同第161集 日の出4遺跡・日の出10遺跡、同第162集 山崎4遺跡、同第163集 山越2遺跡、同第164集 野田生5遺跡、年報2 平成12(2000)年度、北海道立埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書第1集 西崎山ストーンサークル

水沢市埋蔵文化財調査センター

胆沢城跡、岩手県水沢市文化財報告書第33集 水沢遺跡群範囲確認調査、同第35集 水沢遺跡群範囲確認調査

(財)山形県埋蔵文化財センター

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第57集 上高田遺跡第2・3次発掘調査報告書、同第61集 高松Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書、同第62集 木ノ沢橋跡発掘調査報告書、同第63集 睦合館跡発掘調査報告書、同第64集 ハツ目久保遺跡発掘調査報告書、同第65集 宮の前遺跡第3次発掘調査報告書、同第67集 木樽遺跡発掘調査報告書、同第68集 東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書(2)、同第69集 城南一丁目遺跡発掘調査報告書、同第70集 四ツ塚遺跡発掘調査報告書、同第71集 野向遺跡・市野々向原遺跡・千野遺跡発掘調査報告書、同第72集 オサヤズ遺跡発掘調査報告書、同第73集 東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書(3)、同第74集 四ツ塚遺跡第2次発掘調査報告書、同第75集 中里遺跡第2次発掘調査報告書、同第76集 北柳1遺跡第2次発掘調査報告書、同第77集 中地藏遺跡発掘調査報告書、年報平成10～12年度

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集 武田西塙遺跡、同第22集 船窪Ⅳ、同第23集 向野Ⅲ

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告

書第158集 荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡、同第187集 今井道上・道下遺跡、同第209集 西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ、同第265集 荒砥荒子遺跡、同第266集 白川笹塚遺跡・白岩浦久保遺跡・白岩民部遺跡、同第268集 長久保大畑遺跡・新田入口遺跡、同第272集 小八木志志貝戸遺跡群2、同第273集 宿横手三波川遺跡、同第274集 西横手遺跡群、同第275集 小八木志志貝戸遺跡群3、同第277集 八寸長溝遺跡、同第278集 徳丸仲田遺跡(1)、同第279集 愛宕山遺跡、同第280集 亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡、同第282集 舞台遺跡(1)、同第285集 中組遺跡、研究紀要19、くにはな 国華、古墳と埴輪、ぐんま遺跡探検(CD-ROM)

(財)千葉県文化財センター

研究連絡誌第60号、千葉県文化財センター調査報告第417集 成東町・山武町嶋戸東遺跡第4次発掘調査報告書

(財)君津郡市文化財センター

(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第167集 上用瀬遺跡Ⅲ、同第168集 三直中郷遺跡確認調査報告書、同第170集 井尻遺跡、同第171集 谷ノ台遺跡、年報No.18

(財)香取郡市文化財センター

(財)香取郡市文化財センター調査報告書第72集 伊地山遺跡Ⅱ、同第73集 名木不光寺遺跡、同第74集 長津台2号遺跡(2)、同第75集 島八幡下遺跡、同第76集 長津台2号遺跡(1)、同第77集 所城跡、同第78集 大崎城跡、同第79集 五十塚遺跡、事業報告X

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

資料目録12、汐留遺跡Ⅶ、東京都埋蔵文化財センター調査報告書第86集 尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ、同第89集 日野市栄町遺跡Ⅱ、同第93集 袋低地遺跡、同第95集 天神前遺跡・瀬戸岡古墳群・上賀多遺跡・新道通遺跡・南小宮遺跡、同第96集 多摩ニュータウン遺跡、同第97集 尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅶ、同第98集 尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅷ、同第99集 多摩ニュータウン遺跡、同第101集 百人町三丁目西遺跡Ⅴ

(財)かながわ考古学財団



図録・長津田遺跡群、かながわ考古学財団調査報告46 池子遺跡群X、同100 一升枳遺跡所在やぐら群、同106 名越遺跡内大谷戸やぐら群、同107 釜利谷東6丁目地区やぐら群、同108 下槽屋・下町並遺跡、同112 一心院跡所在やぐら群、同113 光触寺橋やぐら・大江稲荷跡所在やぐら、同114 宅間谷西第2やぐら群、同115 覚園寺総門跡東やぐら群、同116 長勝寺跡内やぐら群、同118 三ヶ岡遺跡Ⅱ、研究紀要6、『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター年報10、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告27 E5遺跡、同29 前高山遺跡・前高山北遺跡

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書55 駒込遺跡

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第99集 堀越館跡、同第101集 大久保遺跡、同第104集 梯子谷窯跡、同第105集 木田遺跡

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

埋蔵文化財調査概要平成12年度、紀要 第4号、埋蔵文化財年報(12)、安居窯跡群発掘調査レポート、富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第13集 井ノ口城跡・下山新東遺跡・下山新遺跡

富山県埋蔵文化財センター

年報 平成11年度

金沢市埋蔵文化財センター

金沢市文化財紀要168 神野遺跡Ⅱ、同169 金沢市末古窯跡群Ⅱ、同170 笠舞A遺跡、同170 高岡町遺跡Ⅰ、同172 昭和町遺跡Ⅰ、同173 金沢市醒ヶ井遺跡、同174 戸水大西遺跡Ⅱ、同176 平成12年度金沢市埋蔵文化財調査年報

(財)岐阜市教育文化振興事業団

平成11・12年度岐阜市内遺跡発掘調査報告書

(財)土岐市埋蔵文化財センター

八幡窯跡発掘調査報告書

多治見市文化財保護センター

多治見市埋蔵文化財発掘調査報告第66号 北小木

愛知県埋蔵文化財センター

年報 平成12年度、研究紀要 第2号、愛知県埋蔵文化財情報16

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

平成12年度年報、研究紀要 第9輯、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告第23

集 広久手18・20・30号窯跡

三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道名古屋関線(亀山～亀山)埋蔵文化財調査概報、近畿自動車道神戸線(第二名神)愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財調査概報Ⅳ、一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財調査概報Ⅶ、三重県埋蔵文化財調査報告208-2 発シB遺跡、同215 国分北遺跡発掘調査報告、同217 力尾城跡発掘調査報告、同218 嶋抜、同219 有滝道遺跡、同221 蛇谷貝塚発掘調査報告、同222 天花寺北瀬古遺跡(第2次)発掘調査報告、同223 神戸遺跡(第2次)・替田遺跡(第3次)発掘調査報告、同224 松尾前田遺跡発掘調査報告、同225 金剛坂遺跡(第5次)・辰ノ口古墳群(第3次)発掘調査報告

嬉野町埋蔵文化財センター

嬉野町埋蔵文化財調査報告第14集 下沖遺跡発掘調査報告書、平成12年度嬉野町文化財年報、嬉野町の仏像、嬉野町のほとけさん(CD-ROM)

(財)滋賀県文化財保護協会

レトロ・レトロの展覧会

大津市埋蔵文化財調査センター

大津市埋蔵文化財調査報告書32 大津市遺跡分布地図

(財)大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第14集 箱作今池遺跡発掘調査報告書、同第55集 向出遺跡、同第57集 栗栖山南墳墓群、同第59集 住吉宮の前遺跡、同第60集 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書、同第61集 長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡・有池遺跡・門真遺跡群、同第62集 小阪遺跡Ⅱ、同第63集 伽羅橋遺跡発掘調査報告書、同第64集 伯太北遺跡、池島・福万寺遺跡発掘調査概要X X V、男里遺跡発掘調査資料集

(財)大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告XⅥ、同XⅦ、長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ、瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告

(財)枚方市文化財研究調査会

枚方宿の陶磁器、市立枚方宿鍵屋資料館展示案内、東海道 枚方宿展示案内

(財)元興寺文化財研究所

古代研究30、旧練兵場遺跡、高山町埋蔵文化財調査報告書8 軍原遺跡、案内

桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書16集 平成6年度国庫補助事業による発掘調査報告書、同21集 平成11年度国庫補助事業による

発掘調査報告書、同22集 平成12年度国庫補助事業による発掘調査報告書、桜井市内埋蔵文化財1999年度発掘調査報告書3

(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県教育文化財団調査報告書69 佐賀上台遺跡、同70 市瀬市奥遺跡、同71 大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡、同72 青谷上寺地遺跡3、同73 霞遺跡群、鳥取県の弥生時代資料(写真集)

(財)徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第30集 新蔵町1丁目遺跡企業局総合管理事務所地点Ⅱ、同第31集 新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点、徳島県埋蔵文化財センター調査概報第3集 阿讃山脈東南縁の古墳群、年報Vol.11

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

年報 第9号、(財)高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第46集 具同中山遺跡群Ⅱ、同第47集 奥谷三波南遺跡Ⅱ、同第48集 具同中山遺跡群Ⅲ、同第49集 間城跡、同第50集 北高田遺跡、同第51集 八田奈呂遺跡Ⅱ、同第52集 北地アリノ木遺跡、同第53集 具同中山遺跡群Ⅱ、同第54集 神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡、同第55集 光永・岡ノ下遺跡、同第56集 具同中山遺跡群Ⅱ、同第57集 天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ、同第58集 具同中山遺跡群Ⅴ、同第59集 具同中山遺跡群Ⅳ、同第60集 天神遺跡Ⅱ、同第61集 西鴨地遺跡、同第62集 居徳遺跡群Ⅰ

(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 北九州市埋蔵文化財調査報告書第255集 木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡1、同第256集 御座遺跡、同第257集 貫・井手ヶ本遺跡、同第258集 小倉城御普請所跡、同第259集 下石田遺跡、同第260集 長野フンデ遺跡2、同第261集 米町遺跡2、同第262集 長野小西田遺跡2、同第263集 長野角屋敷遺跡2、同第264集 上貫遺跡(C)、同第265集 木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡2、同第266集 木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡3、同第267集 金丸遺跡3、研究紀要第15号、埋蔵文化財調査年報17 平成11年度

久留米市埋蔵文化財センター

久留米市文化財調査報告書第164集 筑後国府跡第168次調査、同第165集 格屋敷遺跡、同第166集 大谷古墳群、同第167集 久留米市埋蔵文化財集報Ⅲ、同第168集 筑後国府跡第170次調査、同第169集 久留米城下町遺跡第14次調査、同第170集 筑後国府跡第169次、同第171集 旗原遺跡、同第172集 筑後国府跡第173次

調査報告、同第173集 横道遺跡Ⅱ、同第174集 金丸遺跡Ⅱ、同第175集 平成12年度久留米市内遺跡群

宮崎県埋蔵文化財センター

池内横穴墓群発掘調査整理報告書、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集 右葛ヶ迫遺跡、同第30集 内宮田遺跡・柳迫遺跡・中別府遺跡、同第31集 木城村古墳27号・60号横穴墓、同第32集 梅ヶ島遺跡・大辻屋敷遺跡、同第33集 権現原第2遺跡・杉木原遺跡・永ノ原遺跡、同第34集 本城原遺跡、同第35集 井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡、同第37集 元地原遺跡、同第38集 大岩田上村遺跡、同第39集 町屋敷遺跡、同第40集 上ノ迫遺跡、同第41集 虎崩・榎木田遺跡・黒勢戸・上示野遺跡、同第42集 梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・箕原遺跡、同第43集 梅木脇遺跡、同第44集 松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡、同第45集 王子原遺跡、同第46集 志戸平遺跡、同第47集 権現原第1遺跡・下星野遺跡、同第48集 倉岡第2遺跡、同第49集 平成12年度東九州自動車道(都農～西都間)関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第310集 青森県遺跡詳細分布調査報告書ⅩⅢ、同第311集 長留池遺跡、同第312集 十三湊遺跡Ⅵ

森田村教育委員会

森田村緊急発掘調査報告書第7集 八重菊(1)遺跡

岩手県教育委員会

平泉文化研究年報 第1号

古川市教育委員会

宮城県古川市文化財調査報告書第22集 名生館官衙遺跡ⅩⅦ、同第23集 名生館官衙遺跡ⅩⅧ、同第28集 名生館官衙遺跡ⅩⅨ・南小林遺跡

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集 古志田東遺跡、同第74集 遺跡詳細分布調査報告書第14集、同第75集 大浦B遺跡発掘調査報告書

群馬町教育委員会

群馬町埋蔵文化財調査報告第57集 保渡田八幡塚古墳

志木市教育委員会

志木市の文化財第30集 志木市遺跡群11、同第31集 中野遺跡第25地点

富津市教育委員会

内裏塚古塚・北笹塚遺跡第2地点・内裏塚南方

遺跡第4地点  
**木更津市教育委員会**  
中台遺跡、庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡、真武根陣屋跡・中越遺跡・内屋敷遺跡  
**袖ヶ浦市教育委員会**  
市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 東萩原遺跡・美生遺跡、同Ⅱ 根形台遺跡群Ⅰ  
**府中市教育委員会**  
府中市埋蔵文化財調査報告書第29集・武蔵国府関連遺跡調査報告28・武蔵国分寺跡調査報告5  
**藤沢市教育委員会**  
藤沢市文化財調査報告書第36集 藤沢市No.265遺跡発掘調査報告書  
**小田原市教育委員会**  
小田原市文化財調査報告書第84集 小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅱ地点、同第85集 高田北之前遺跡第Ⅰ地点、同第86集 平成10年度遺跡範囲確認調査、同第87集 千代北町遺跡第Ⅷ地点、同第88集 小田原城 八幡山古郭南曲輪第Ⅰ地点、同第89集 小田原城総構、平成12年度小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会  
**伊那市教育委員会**  
下手良中原・大原・松太郎窪遺跡  
**燕市教育委員会**  
燕市埋蔵文化財調査報告書第1集 三角田遺跡  
**武生市教育委員会**  
武生市埋蔵文化財調査報告21 茶臼山古墳群  
**敦賀市教育委員会**  
穴地藏古墳、越前愛発関調査概報Ⅳ  
**三島市教育委員会**  
多呂ノ前遺跡発掘調査報告書、三島市文化財年報第12号、史跡山中城跡  
**菊川町教育委員会**  
菊川町埋蔵文化財調査報告書第62集 白岩遺跡2001南  
**稲沢市教育委員会**  
下津北山遺跡発掘調査報告書Ⅰ  
**豊橋市教育委員会**  
豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 岩屋下古窯、同第55集 吉田城址(Ⅳ)、同第56集 奈木4号墳、同第57集 高井遺跡(Ⅱ)・荒木2号墳・下角庵遺跡、同第58集 本郷遺跡(Ⅰ)、平成12年度三ツ山古墳調査概要(Ⅲ)  
**上野市教育委員会**  
上野市埋蔵文化財年報7、上野市文化財調査報告48 高野遺跡発掘調査報告、同67 国遺跡旧崇廣堂(4～7次)発掘調査報告  
**四日市市教育委員会**  
四日市市文化財保護年報11、一般国道1号北勢

バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ、四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書27 菅野遺跡、四日市市遺跡調査会文化財調査報告書ⅩⅩⅩⅣ 平尾城跡  
**上野市教育委員会**  
上野市文化財調査報告49 御墓山窯跡発掘調査報告  
**草津市教育委員会**  
草津市文化財調査報告書第42冊 柳遺跡発掘調査概要  
**今津町教育委員会**  
今津町文化財調査報告書第25集 日置前廃寺発掘調査概要報告書  
**岸和田市教育委員会**  
岸和田市文化財調査概要27 平成12年度発掘調査概要  
**大阪市ゆとりとみどり振興局**  
特別史跡 大坂城跡石垣修復工事施工報告書  
**柏原市教育委員会**  
今に残る村相撲、柏原市埋蔵文化財発掘概報2000年度、安福寺横穴群他調査概報2000年度、柏原市遺跡群発掘調査概報2000年度、玉手山古墳群の研究Ⅰ、武田塾資料目録(1)  
**枚方市教育委員会**  
枚方市文化財調査報告第37集 枚方市埋蔵文化財発掘調査概要2000、検証古代の河内と百済  
**高石市教育委員会**  
大園遺跡他の発掘調査概要  
**富田林市教育委員会**  
富田林市埋蔵文化財調査報告32 平成12年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書  
**豊中市教育委員会**  
豊中市文化財調査報告書第48集 蛭池北遺跡第1次発掘調査報告書、同第49集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成12年度  
**東大阪市教育委員会**  
東大阪の古墳(改訂版)、東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告平成12年度、瓜生堂遺跡第147-1次発掘調査中間報告書、瓜生堂遺跡第49次発掘調査報告書、鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告、神並遺跡第26次発掘調査報告、東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報  
**八尾市教育委員会**  
国史跡心合寺山古墳、八尾市文化財調査報告44 八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書、同45 心合寺山古墳発掘調査概要報告書、八尾市立埋蔵文化財調査センター報告1、同2  
**和泉市教育委員会**  
よみがえるいずみの高殿、和泉市埋蔵文化財発

- 掘調査概報11  
**羽曳野市教育委員会**  
 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書40 羽曳野市内遺跡調査報告書平成4年度、同41 羽曳野市内遺跡調査報告書平成9年度、同42 羽曳野市内遺跡調査報告書平成10年度、同43 古市遺跡群XXII、第15回はびきの歴史シンポジウム 大王を支えた人々
- 貝塚市教育委員会**  
 貝塚市埋蔵文化財調査報告第50集 海塚遺跡発掘調査概要、同第51集 沢城跡発掘調査概要、同第52集 沢共同墓地遺跡発掘調査概要、同第53集 津田北遺跡発掘調査報告書、同第54集 貝塚市遺跡群発掘調査概要22、同第56集 貝塚市内遺跡群発掘調査概要、同第57集 加治・神前・畠中遺跡群発掘調査概要9、同第58集 貝塚市遺跡群発掘調査概要23
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所**  
 兵庫県埋蔵文化財研究紀要創刊号
- 小野市教育委員会**  
 小野市文化財調査報告23 来住北代遺跡(北地区)・来住北代遺跡(中地区)・来住長ヲサ遺跡、同24 王子辻ノ内遺跡発掘調査報告書2
- 加古川市教育委員会**  
 加古川市文化財調査報告書13 奥新田西古墳発掘調査報告書、行者塚古墳の時代
- 姫路市教育委員会**  
 TSUBOHORI 平成11年度姫路市埋蔵文化財調査略報
- 三木市教育委員会**  
 三木市文化財研究資料第17集 三木市遺跡分布地図
- 淡路町教育委員会**  
 淡路町埋蔵文化財調査報告書第1集 淡路町遺跡分布図
- 八鹿町教育委員会**  
 兵庫県八鹿町文化財調査報告書第16集 八木御里遺跡
- 天理市教育委員会**  
 天理市埋蔵文化財調査報告第7集 西殿塚古墳・東殿塚古墳
- 橿原市教育委員会**  
 橿原市埋蔵文化財調査概要17 橿原市埋蔵文化財発掘調査概報平成11年度、同18 橿原市埋蔵文化財発掘調査概報平成12年度
- 岩出町教育委員会**  
 岩出町内遺跡発掘調査概報、根来寺坊院跡発掘調査概報
- 安来市教育委員会**  
 安来市埋蔵文化財調査報告第36集 八神横穴墓群、同第37集 永源寺要害・宮谷1号墳
- 益田市教育委員会**  
 暁音寺発掘調査概要報告書
- 井原市教育委員会**  
 井原市遺跡地図
- 総社市教育委員会**  
 総社市埋蔵文化財年報10
- 矢掛町教育委員会**  
 矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告1 清水谷遺跡
- 邑久町教育委員会**  
 邑久町遺跡地図
- 北房町教育委員会**  
 定東塚・西塚古墳
- 三原市教育委員会**  
 三原市文化財調査報告書第5集 三原市内遺跡分布図
- 山口市教育委員会**  
 山口市埋蔵文化財調査報告第62集 上東遺跡、同第76集 乗福寺跡・御堀遺跡、同第77集 上東遺跡
- 下関市教育委員会**  
 下関市埋蔵文化財調査報告書47 伊倉遺跡、同54 伊倉遺跡、同71 長門国府跡、同72 長門国府跡、同73 長門国府跡、同74 熊野原遺跡
- 徳島市教育委員会**  
 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要10、阿波国府跡発掘調査報告書、阿波国府跡発掘調査報告書
- 高松市教育委員会**  
 高松市埋蔵文化財調査報告書第52集 松縄下所遺跡、同第53集 木太中村遺跡、同第54集 高松市内遺跡発掘調査概報、同第50集 香西南西打遺跡、同第51集 鬼無藤井遺跡
- 福岡県教育委員会**  
 大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦 型式一覧、大宰府史跡発掘調査報告書I、仁右衛門畑遺跡II、船越高原A遺跡II、上唐原了遺跡III、福岡県埋蔵文化財発掘調査年報 平成10年度、同平成11年度、福岡県文化財調査報告書第156集 曾根田前田遺跡II、同第157集 西新町遺跡III、同第158集 長野古墳群、同第159集 農林漁業用揮発油税財源身替農道関係埋蔵文化財調査報告1、同第160集 川原西遺跡第3地点、同第161集 越路六郎遺跡・越路貴船遺跡、同第162集 屋永東原遺跡、同第163集 内ヶ磯窯跡1、同第164集 山ノ上遺跡・赤坂古墳群、同第165集 本郷流川遺跡
- 北九州市教育委員会**  
 北九州市文化財調査報告書第54集 八ヶ迫山墳

墓群、同第55集 西園大畠遺跡、同第56集 田町遺跡、同第57集 小倉城北の丸跡、同第59集 京町遺跡、同第60集 小倉城跡、同第61集 早稲田遺跡、同第88集 高坊遺跡、同第90集 鬼ヶ原遺跡、同第91集 大手町遺跡、同第92集 小倉城大坂町遺跡

#### 筑後市教育委員会

筑後市文化財調査報告書第31集 上北島塚ノ本遺跡、同第32集 筑後北部第二地区遺跡群Ⅱ、同第33集 筑後市内遺跡群Ⅱ、同第34集 筑後西部2地区遺跡群Ⅳ、同第35集 筑後東部地区遺跡群Ⅴ、同第36集 筑後東部地区遺跡群Ⅵ

#### 大刀洗町教育委員会

大刀洗町文化財調査報告書第21集 鶴木横道遺跡

#### 那珂川町教育委員会

那珂川町文化財調査報告書第53集 野口遺跡群、同第54集 安德原田遺跡群、同第55集 内田遺跡群、同第56集 松木遺跡Ⅳ

#### 岡垣町教育委員会

岡垣町文化財調査報告書第17集 手野古墳群、同第18集 南ノ前古墳群、同第19集 墓ノ尾遺跡第2地点、同第20集 長尾古墳群、同第21集 糠塚遺跡群

#### 築城町教育委員会

史跡船迫窯跡保存整備基本設計、築城町文化財調査報告書第7集 堂山城址、同第8集 築城町棕本遺跡・上別府西福寺遺跡

#### 志免町教育委員会

志免町文化財調査報告書第12集 国指定史跡 七夕池古墳

#### 三潁町教育委員会

三潁町文化財調査報告書第7集 西牟田清導寺浦遺跡

#### 新吉富村教育委員会

新吉富村文化財調査報告書第14集 宇野地区遺跡群Ⅲ

#### 唐津市教育委員会

唐津市埋蔵文化財調査報告書第96集 菅牟田荒谷遺跡、同第97集 東山Ⅰ遺跡、同第98集 外原遺跡、同第99集 衣千古墳群、同第100集 半田新田遺跡、同第101集 唐津市内遺跡確認調査(17)、同第102集 千々賀遺跡

#### 鎮西町教育委員会

鎮西町文化財発掘調査報告書第19集 長宗我部元親陣跡

#### 長崎県教育庁

長崎県文化財調査報告書第158集 長崎県埋蔵文化財調査年報、同第159集 県内主要遺跡内

容確認調査Ⅳ、同第160集 平野遺跡、同第161集 稗田原遺跡Ⅴ、同第162集 栄町遺跡、同第163集 石田城跡Ⅱ、平成12年度原の辻大学講座「一支国探訪」記録集、姉妹遺跡パンフレット

#### 大分県教育委員会

大分県文化財調査報告書第114輯 下ノ山遺跡、同第115輯 清太郎遺跡、同第116輯 大波羅遺跡、同第117輯 富貴寺遺跡、同第118輯 虫喰谷遺跡、同第119輯 安国寺遺跡、同第120輯 大園遺跡、同第121輯 毛井遺跡A地区、同第122輯 二目川遺跡、同第123輯 上野遺跡群・大分上野丘高校地区、同第124輯 行者原狐塚古墳、同第125輯 西山社製糸工場跡・旧古町橋跡・吉田屋敷跡・武藤家屋敷跡・上家屋敷跡・由学館跡、同第127輯 浮殿遺跡、同第128輯・久住町文化財調査報告書第9集 都野原田遺跡、同第129輯 尾鼻遺跡、同第130輯 城前遺跡、上野第1遺跡、後迫遺跡、大分県埋蔵文化財年報9

#### 日田市教育委員会

平成6年度(1994年度)日田市埋蔵文化財年報、同平成10年度(1998年度)、同平成11年度(1999年度)、吹上遺跡・天満古墳、日田市埋蔵文化財調査報告書第8集 惣田遺跡、同第15集 小迫辻原遺跡、同第19集 本村遺跡、同第20集 山口遺跡、同第21集 日田条里上手地区、同第22集 徳瀬遺跡第3次、同第23集 上ノ馬場遺跡、同第24集 三和教田遺跡D地点、同第25集 元宮遺跡、同第26集 山ノ口遺跡、同第27集 三和教田遺跡G地点、同第28集 平島遺跡D地点・塔ノ本古墳・祇園原遺跡2次・長迫遺跡C地点・長迫遺跡D地点・尾漕遺跡6次、同第29集 大波羅遺跡、同第30集 尾漕遺跡、同第31集 日田条里上手地区5次、同第32集 川原田遺跡、ありたを掘る

#### 中津市教育委員会

中津市文化財調査報告第26集 長者屋敷遺跡

#### 玖珠町教育委員会

よみがえる角牟礼城、玖珠町文化財調査報告書第10集 アタタメ遺跡、同第11集 坂口遺跡、同第12集 角牟礼城跡

#### 三重町教育委員会

三重地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ、同Ⅴ

#### 千歳村教育委員会

千歳村文化財調査報告書第Ⅶ集 鹿道原遺跡

#### えびの市教育委員会

島内地下式横穴墓群分布範囲確認調査に伴う地中レーダー探査結果報告、えびの市埋蔵文化財

- 調査報告書第24集 内小野遺跡、同第28集 天神免遺跡、同第29集 島内地下式横穴墓群、同第30集 昌明寺遺跡、同第31集 東川北地区遺跡群
- 高岡町教育委員会**  
高岡町埋蔵文化財調査報告書第20集 的野遺跡、同第21集 三生江遺跡、同第22集 中原遺跡
- 青森県立郷土館**  
収蔵資料目録第3集・考古編(2)
- 岩手県立博物館**  
研究報告 第18号
- 東北歴史資料館**  
平成12年度年報、研究紀要2
- 仙台市博物館**  
仙台城—しろ・まち・ひと—
- 秋田県立博物館**  
絵馬、研究報告 第26号、年報平成13年度
- 玉里村立史料館**  
館報 第6号  
埼玉県立さきたま資料館  
調査研究報告 第14号
- さいたま市立浦和博物館**  
浦和市博物館研究調査報告書 第28集
- 国立歴史民俗博物館**  
研究報告 第86、87、90集、近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究
- 千葉市立加曽利貝塚博物館**  
紀要 第28号
- (財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館**  
内藤町遺跡Ⅲ
- 大田区立郷土博物館**  
紀要 第11号、顔がついた土器
- (財)府中文化振興財団府中市郷土の森博物館**  
紀要 第14号
- 青梅市郷土博物館**  
霞台遺跡発掘調査報告書、下前遺跡発掘調査概報
- 出光美術館**  
館報 第114号
- 神奈川県立歴史博物館**  
神奈川県立歴史博物館年報平成12年度
- 茅ヶ崎市文化資料館**  
文化資料館調査研究報告9
- 新潟県立歴史博物館**  
研究紀要 第2号
- 長岡市立科学博物館**  
研究報告 第36号
- 石川県立歴史博物館**  
バイカル湖地域に生きた人々
- 三方町縄文博物館**  
常設展示図録、土器の径・壺、よみがえるハニワ工場
- 岐阜県博物館**  
館報 第24号、調査研究報告 第22号
- 沼津市歴史民俗資料館**  
沼津市博物館紀要24、同25、大正2年の火災で焼失したセトモノ屋の店先、古文書(9)江梨区有文書目録(3)
- 伊場遺跡資料館内埋蔵文化財事務所**  
滝沢鍾乳洞遺跡Ⅰ、同Ⅱ、城山遺跡、法ヶ崎遺跡・海東遺跡
- 名古屋市博物館**  
研究紀要 第24巻
- 名古屋市秀吉清正記念館**  
館蔵品目録
- 名古屋市見晴台考古資料館**  
埋蔵文化財調査報告書36～39、年報18、見晴台教室'00、はじまりのムラ、研究紀要 第3号
- 豊田市郷土資料館**  
豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 不動1・2号墳・山ノ神古墳・神明社古墳、同第17集 神明遺跡Ⅱ、同第18集 三味線塚古墳、同第19集 新金山遺跡
- 瀬戸市歴史民俗資料館**  
研究紀要ⅩⅧ
- 滋賀県立安土城考古博物館**  
韓国(からくに)より渡り来て、平成12年度年報
- 滋賀県立琵琶湖博物館**  
琵琶湖博物館開設準備室研究調査報告書第8号  
琵琶湖とその集水域の歴史
- 高島町歴史民俗資料館**  
高島町歴史散歩 改訂新版、高島町旧大溝城下町の民家、高島町歴史民俗叢書第10輯 鴻溝録
- 大阪府立弥生文化博物館**  
環濠からのメッセージ、要覧平成12年度
- 大阪府立狭山池博物館**  
常設展示案内
- 大阪府立近つ飛鳥博物館**  
莊厳 飛鳥・白鳳 仏のインテリア
- 八尾市立歴史民俗資料館**  
寺院と神社の成り立ち、研究紀要 第12号、館報(平成11年度)
- 吹田市立博物館**  
館報Ⅰ
- 太子町立竹内街道歴史資料館**  
館報 第7号

神戸市立博物館

館蔵品目録 考古・歴史の部17、同美術の部17、  
年報No.16、研究紀要第17号

西脇市郷土資料館

西脇市文化財調査報告書第9集 比延前田遺跡  
Ⅱ、同第10集 西脇公園山麓開発に伴う横穴式  
石室群集墳の調査

播磨町郷土資料館

館報 平成12年度

橿原市千塚資料館

かしはらの歴史をさぐる8

しんいち歴史民俗博物館

新市町立歴史民俗資料館年報 第2～5号、新  
市町文化財調査報告第7集 後池第17古墳

山口県立山口博物館

研究報告 第27号

下関市立考古博物館

研究紀要 第5号、年報6

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

角島と土井ヶ浜

福岡市博物館

収蔵品目録16、研究紀要 第11号

伊都歴史資料館

前原市文化財整備基本計画、前原市文化財調査  
報告書第67集 JR筑肥線複線化用地内遺跡群、  
同第68集 前原西町遺跡、同第69集 有田塞ノ  
本遺跡

佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

年報 第30号、調査研究書 第25集

鹿児島市立ふるさと考古歴史館

鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書32・33 大  
龍遺跡、同34 大竜遺跡B地点

東北大学埋蔵文化財調査研究センター

東北大学埋蔵文化財調査年報14～16

山形大学歴史・地理・人類学研究会

山形大学歴史・地理・人類学論集 第2号

筑波大学歴史・人類学系

歴史人類 第29号、先史学・考古学研究 第12  
号

青山学院大学文学部史学研究室

青山史学 第19号

明治大学博物館事務局

研究報告 第6号

早稲田大学考古学会

古代 第109号

國學院大学考古学資料館

紀要 第17輯

東洋大学文学部史学科研究室

白山史学 第37号、紀要 第54集 史学科篇第  
26号

日本大学史学会

史叢 第63号

名古屋大学文学部考古学研究室

名古屋大学文学部研究論集140 史学47

滋賀県立大学人間文化学部

人間文化10号

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室

勝福寺古墳測量調査報告書、古墳時代前・中期  
における埋葬人骨と親族関係

天理大学考古学研究室

古事 第5冊

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

島根大学埋蔵文化財調査研究報告第6冊 島根  
大学構内遺跡第10次調査

岡山理科大学図書館

自然科学研究所研究報告第26号

広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室

帝釈遺跡群発掘調査室年報X V

九州大学文学部考古学研究室

玄界灘における海底遺跡の探査と確認調査

熊本大学埋蔵文化財調査室

年報7

忠南大学校百濟研究所

百濟研究 第33輯

(財)アイヌ文化振興・研究推進機構

よみがえる北の中・近世、収蔵品目録2 杉村  
資料I

大宮市遺跡調査会

大宮市文化財調査報告第14集 深作沼動植物調  
査報告、同第15集 大宮の板石塔婆Ⅱ、同第17  
集 大和田村古文書、同第24集 大和田村古文  
書、同第32集 市内遺跡発掘調査報告、同第47  
集 市内遺跡発掘調査報告、同第48集 片岡家  
文書(二)、同第50集 市内遺跡発掘調査報告、  
大宮市遺跡調査会報告第69集 北袋新堀遺跡、  
同第70集 深作原遺跡、同第71集 三橋三島遺  
跡、同第72集 山王遺跡

(株)ジャパン通信情報センター

文化財発掘出土情報第229、230、232、233号

(株)吉川弘文館

新訂増補 國史大系 月報 付異本公卿補任

文京区遺跡調査会

文京区埋蔵文化財調査報告書第8集 原町遺  
跡、同第11集 本郷台遺跡群、同第12集 原町  
第Ⅱ地点、同第13集 弥生町遺跡

葛飾区遺跡調査会

- 平成11年度葛飾区埋蔵文化財年報、葛飾区遺跡調査会調査報告第47集 葛西城X X、同第48集 正福寺遺跡Ⅱ
- 台東区文化財調査会**  
上野忍岡遺跡群 国立科学博物館おれんじ館地点
- 国道411号菅生地区遺跡調査会**  
菅生第三
- 日野新町一丁目住宅遺跡調査会**  
東京都 日野新町姥久保遺跡
- 宮内庁書陵部**  
書陵部紀要第52号
- 文化庁文化財部記念物課**  
発掘された日本列島'95～'99
- 国立国会図書館**  
日本全国書誌 通号2334号、同通号2337号
- 日本考古学協会**  
日本考古学年報52、日本考古学第10号、同第11号
- (株)武蔵文化財研究所**  
板橋区四葉地区遺跡調査報告Ⅶ 四つ葉地区遺跡
- 加藤建設(株)埋蔵文化財調査部**  
四谷一丁目南遺跡、目黒区埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 土器塚遺跡
- 共和開発(株)**  
東京都新宿区内藤町遺跡Ⅳ
- (株)至文堂**  
日本の美術 第423号
- 富山市日本海文化研究所**  
紀要 第14号
- (財)古代学協会**  
経田遺跡発掘調査報告書、古代文化 第53巻第4～6号、仁和寺研究 第2輯
- (株)淡交社**  
樂焼創成 樂ってなんだろう
- (有)白沙堂**  
平安京の土器
- 大阪・郵政考古学会**  
郵政考古紀要 通巻第38冊
- 高安城を探る会**  
高安城と烽、報道記事より見た幻の高安城を探る
- (財)交野市文化財事業団**  
交野市埋蔵文化財調査報告2000-I 森遺跡Ⅶ、同2000-II 森遺跡Ⅷ
- 姫路市立城郭研究室**  
城郭研究室年報第10号、姫路城跡Ⅰ
- (財)黒川古文化研究所**  
神々たちの宴、黒川古文化研究所名品展  
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥資料館  
遺跡を探る  
シルクロード学研究センター  
観音菩薩像の成立と展開  
島根県古代文化センター  
島根県古代文化センター調査研究報告書7 出雲国風土記の研究Ⅱ、同10 かわらけ谷横穴群の研究、しまねの古代文化第8号、古代文化研究 第9号、いにしへの島根(CD-ROM)
- 岡山県古代吉備文化財センター**  
久田原遺跡と久田堀ノ内遺跡、津島遺跡を探る2、百聞川の遺跡探検、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告153 原尾島遺跡・沢田遺跡、同154 天瀬遺跡・岡山城外堀跡、同155 船山遺跡、同156 岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡・三須河原遺跡・三須島田遺跡・井手見延遺跡・井手天原遺跡、同157 下庄遺跡・上東遺跡、同158 上東遺跡、同159 平田遺跡、同160 津島遺跡3、同161 旦山遺跡2
- 博物館等建設推進九州会議・編集委員会**  
Museum Kyushu 季刊第18巻・第2号通巻68号
- 京都市埋蔵文化財調査センター**  
京都市内遺跡発掘調査概報平成12年度、京都市内遺跡立会調査概報平成12年度、京都市内遺跡試掘調査概報平成12年度
- (財)長岡京市埋蔵文化財センター**  
年報 平成11年度、長岡京市埋蔵文化財調査報告書第20集 長岡京跡右京第679次発掘調査報告、長岡京市文化財調査報告書第42冊
- 京都府教育委員会**  
京都府遺跡地図 [第3版] 第1分冊、埋蔵文化財発掘調査概報(2001)
- 久美浜町教育委員会**  
京都府久美浜町文化財調査報告書第22集 油池遺跡
- 宮津市教育委員会**  
宮津市文化財調査報告第35集 宮津城跡第10次発掘調査概要
- 大江町教育委員会**  
大江町文化財調査報告書 第9集
- 三和町教育委員会**  
民俗資料収蔵目録、丹波西国三十七所道中記
- 八幡市教育委員会**  
八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第31集
- 京田辺市教育委員会**  
田辺町埋蔵文化財調査報告書第18集 新宗谷遺



跡発掘調査概報、同第23集 宮ノ下遺跡発掘調査概報、京田辺市埋蔵文化財調査報告書第25集 興戸遺跡第13次・第14次発掘調査概報、同第32集 江津ほ場整備計画地内試掘調査概報

**宇治田原町教育委員会**

宇治田原町埋蔵文化財発掘調査概報第2集 山瀧寺跡Ⅱ

**山城町教育委員会**

京都府山城町埋蔵文化財報告書第26集 山城町内遺跡発掘調査概要 X

**京都府立総合資料館**

資料館紀要 第29号

**日吉町郷土資料館**

民家に刻まれた歴史

**亀岡市文化資料館**

館報 第7号、亀岡人物ものがたり、発掘—まもる・つくる・たのしむ—、消えたふるさとの音の風景

**城陽市歴史民俗資料館**

館報 第6号

**京都大学大型計算機センター**

第67回研究セミナー報告

**佛教大学総合研究所**

紀要 第8号

**八木史談会**

郷土誌八木 合冊其の一、同合冊其の二

**精華町の自然と歴史を学ぶ会**

波布里曾能第18号

**磯部武男**

藤枝市郷土博物館年報・紀要No. 1

**一瀬和夫**

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第61集 長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群

**片山一道**

古人骨は語る、考える足、縄文人と「弥生人」

**梶 國男**

多摩考古 第31号

**富井 眞**

先史の観念

**中村幸夫**

高安城と烽—基本資料集、報道記事より見た幻の高安城を探る

**北條朝彦**

書陵部紀要第52号抜刷 仁徳天皇

**水野正好**

靈山寺と菩提僧正記念論集

**森島康雄**

### 編集後記

今夏は、猛暑で雨が少なく、現場作業にとっては辛い日が続きました。情報81号が完成しましたのでお届けします。

さて、本号では、下植野南遺跡の古墳時代中期以降の成果についての抄報を中心に、職員の研究成果についても掲載することが出来ました。このうち、鉦の副葬作法についての研究は、本誌78号所載論文の続編で、今後、朝鮮半島にも視野を広げていくものと期待されます。よろしくご味読下さい。

(編集担当=森島康雄)

## 京都府埋蔵文化財情報 第81号

平成13年9月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル  
Tel (075)441-3155(代) Fax (075)417-2050(代)



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER